

390  
MI964  
㊄



0055484-000

390-Mi964ウ

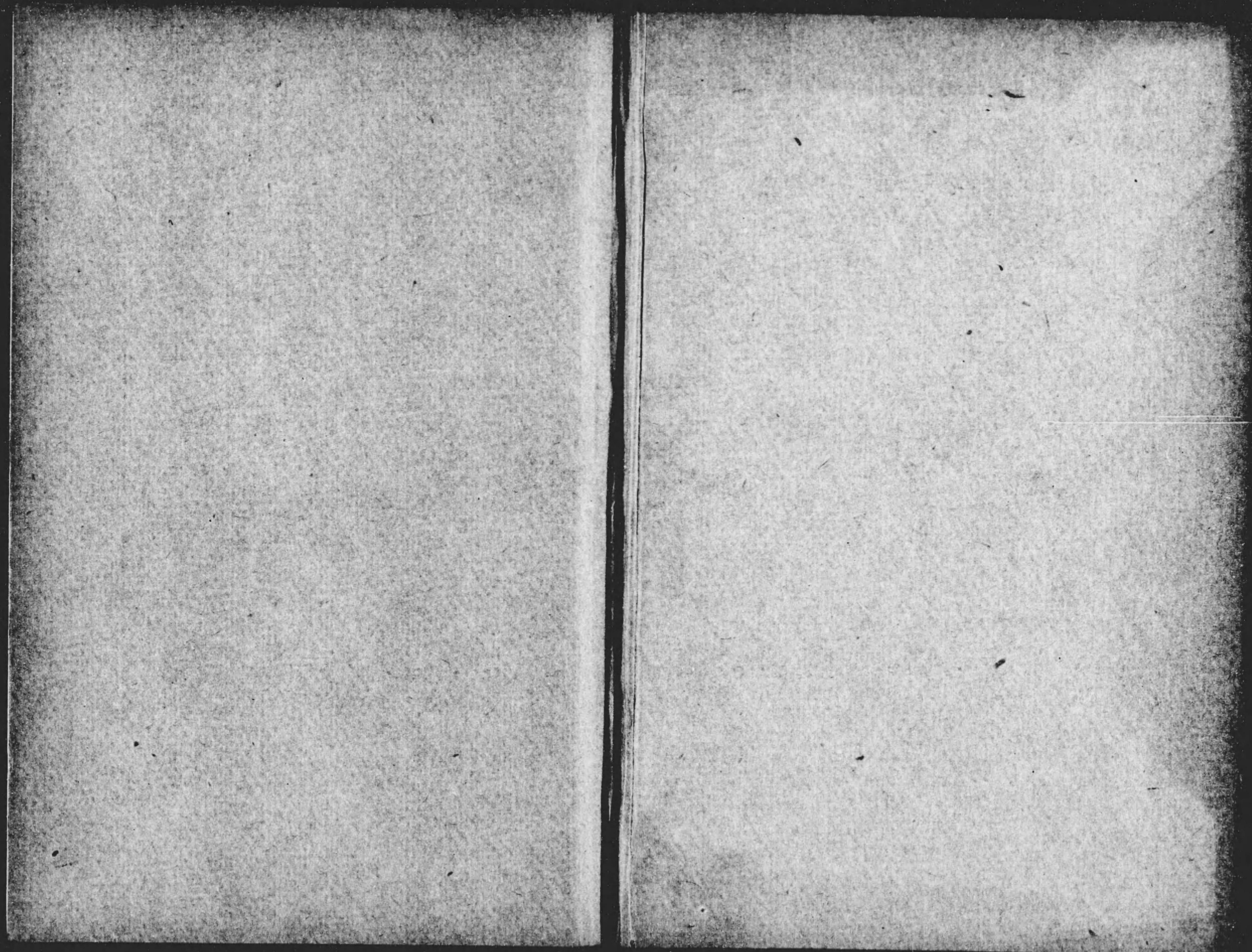
民衆政治講座 無産階級と国防  
問題

クララ社

第9巻

昭和4

AJA



民衆政治講座

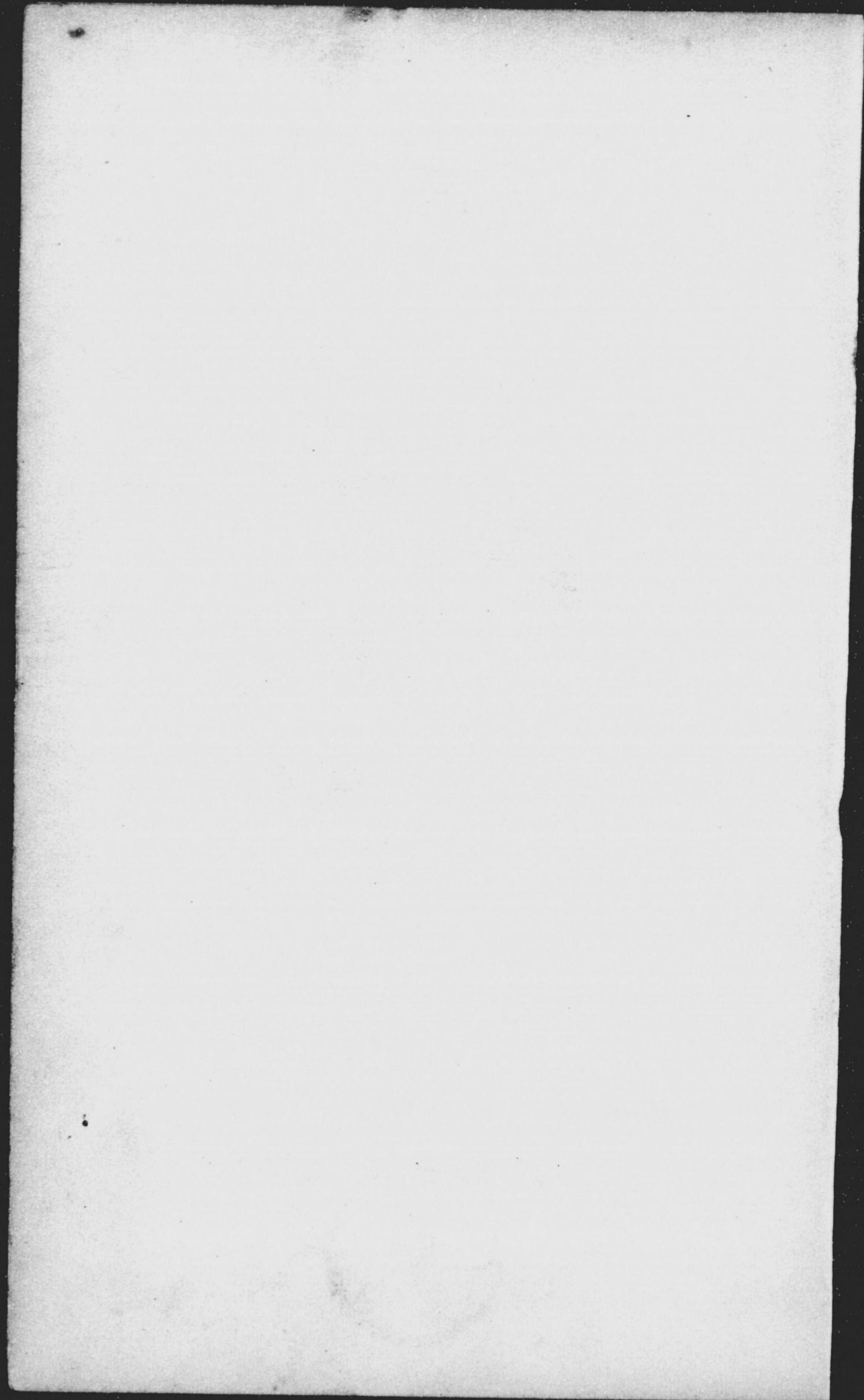
無産階級と国防問題

水野廣徳著

307

SMI

クララ出版





390  
MI.964  
①

無産階級と国防問題

水野廣徳著

民衆政治講座

No. 9

クララ社版





著者の近影

## 序

587-110

やれ憲法違反の、やれ國體無視のと、樞密院で散々こづき廻はされたる不戦條約も、我國最後批准の光榮の下に、愈本日正午を以て効力發生を宣布せられた。何は兎もあれ世界の爲めに慶祝の至りであると言はねばなるまい。參加國數四十又六、地球上の國らしい國は悉く加入して居る。條約第一條に、

締約國は國際紛議解決の爲め戰爭に訴ふることを非とし、且其の相互關係に於て國家の政策の手段として戰爭を拋棄することを其の各自の人民の名に於て嚴肅に宣言す。

とある。其人民の名に於てであらうと、あるまいと、我が國が嚴肅に宣言したる戰爭拋棄を嚴格に遵守するならば、今後の世界に最早や戰爭は無い譯である。戰爭が無ければ自ら國防も軍備も亦無要である。今頃國防論や軍備論を擔き出すことは、聊か晝提灯の誹を免れ得ぬであらう。

併しながら女郎の起請と政治の約束ぐらゐる當にならぬものはない。彼等ブルジョア政治家が當面の軍縮問題を如何に取扱ふかと、不戦條約の權威をためす試金石である。徹底したる軍備の縮

少をすも断行し得ぬ様な國が、不戰條約を締結するなどは頗る片腹痛き觀がある。況して無断で「人民の名に於て」宣言するなどは僭越の至りである。

我等は唯望を平和主義なる英國の労働黨政府と、米國大統領の個人的人格とにのみ屬する。

本書前篇は今回新に執筆したるもの、後篇は舊稿を修補したるもの、多少の重複なきを保せず、讀者諸君の諒を請ふところである。

昭和四年七月二十四日  
不戰條約宣布の日

著 者

目 次

上 編 無産階級と國防論

- 第一章 軍備の目的 ..... 一
- 第二章 軍備の性質 ..... 一五
- 第三章 戦争に勝てぬ軍備 ..... 三二
- 第四章 軍備で勝てぬ戦争 ..... 三九
- 第五章 軍備は戦争を激發す ..... 三七
- 第六章 軍備は無産階級の負擔 ..... 四六
- 第七章 軍備は國際戦の支持者 ..... 五三
- 第八章 軍備の變遷と無産階級 ..... 六三

下 編 現代軍備論

- 第一章 現代軍備と戦争 ..... 六九
- 第二章 現代軍備と政治 ..... 七九

第三章 軍備制定と我國の制度 ..... 八

第四章 現代軍備と經濟 ..... 六六

第五章 現代戰爭と經濟 ..... 一〇六

第六章 現代軍備と外交 ..... 一二六

第七章 現代軍備と帝國主義 ..... 一二四

第八章 現代軍備と社會主義 ..... 一三一

第九章 結 言 ..... 一三五

上編 無産階級と國防論

第十章 軍備の目的

外には世界の平和を目的とする國際聯盟が結ばれて頻りに軍備縮少が唱へられ、各國政府亦内心はいざ知らず表面には之に賛意を表し、専門の軍縮委員が之までに幾回か會議を重ねたるも、今日尙ほ未だ具體的軍縮案の目鼻さへ付かず、軍備は寧ろ益擴張せられたつさへある。

内には經濟困難の叫び高く、曩さには議會に於て滿場一致之が善處の決議を爲し今は新内閣に依つて財政緊縮が唱へられ、官廳の自動車費さへ節約して局課長連をしておテクリに泣かしめるかと思へば、一面には四億五千萬圓といふ大金が何の惜し氣もなく、不生産的な軍備費に支出されて居る。



一體何が故にそれ程までに軍備が必要なのであるか。

それ程までに必要な軍備を何故縮少せねばならぬのか。

更に又各國政府が悉く之に同意しながら何故に軍備の縮少が實行せられないか。今の世に於て國家の重大なる施設中、軍備ぐらゐ譯の判らぬものはない。

何故に國家は貧乏に苦しみながらも、大金を支出して軍備を張らねばならぬのであらうか。一體抑々軍備といふものは何の爲めに存するのであらうか。

之を小學校の生徒に尋ねたなら、屹度戰爭に勝つ爲めと正直に答へるであらう。

之を中學校の生徒に尋ねたなら、外國の攻撃に對して國家を防衛する爲めと氣取つて答へるであらう。

之を高等學校の學生に尋ねたなら、或者は他國の野心を抑制し世界の平和を維持する爲めと軍教式答案を出すであらう。

更に大學の學生に尋ねたなら、軍備は無産階級の膏血を搾つて資本主義的帝國主

義を擁護茲に遂行する爲めとマルクス流に答へる者もあるかも知れない。

其の答案の如何に拘はらず、軍備なるものは現代の國家に於ては無くしてはならぬものであるが如くに思はれる。サウエート露西亞の如く人類の絶對平等と世界の絶對平和とを主義とせる共產主義國に於てすら、其の目的の何であるかは別として相等大なる軍備を有し、最近支那との關係に於ても頻りに赤衛軍の活動が傳へられて居る。

殊に大國とか強國とか稱へて、國際間に幅を利かすには是非とも大なる軍備を必要とすることが現代の事實である。或は之を逆に、大なる軍備を有する國が國際間に幅を利かすといふことも亦争はれぬ事實である。現に我日本が世界の五大國とか三大國とか言はれて國際間に重きを爲せる所以は、日本の文化が進んで居る爲めでもなく、日本の經濟が富んで居る爲めでもなく、又日本の民族が特に優れて居る爲めでもなく、唯其の海軍の軍備が強大なる爲めである。軍縮に反對する日本の老軍

人達が、**中外一論**のだから日本は軍縮をやらねと云ふが、之も一面の觀察である。

だから一等國とか、五大國とか呼ばれることを名譽とする國家的虚榮心の強い國民は、同胞を餓死しても構はない、小供を無教育にしても構はない、貧乏を質に置いてさへも成るべく多数の軍艦や軍隊を備へたがるのに不思議はない。自尊尙武の封建的傳統思想の尙ほ強き我國民が殆んど迷信的に軍備を熱愛するものも、一は此國際間に幅を利かすといふ國家的虚榮心の爲めである。

そして國家一朝事有るの秋其の尨大なる艦隊や多大なる軍隊をば活動せしめ得るの力あるや否やを察せず、觀兵式や觀艦式の新開寫眞を見て悦んで居る國民がありとすれば漫畫的滑稽である。

抑々一等國とか何大國とかであることに依つて、國際聯盟の常任理事國たる以外に、どれ程の國家的役得、國民的利益があるのであらうか。一等國だからとて失業

者や無産者の無い國を聞かない。何大國だからとて労働者が搾取せられぬ國を見ない。若し夫れ軍備の一等國を誇りながら、産業の特殊國を以て甘んずるに至つては虚榮國民の悲哀であると言はねばならぬ。

然らば虚榮にせよ、實榮にせよ、強大なる軍備即ち國家的暴力を有する國が國際間に幅を利かすのは何故であらう。亞弗利加のネグロや臺灣の生蕃仲間では、氣が荒くて腕つ節の強い男が社會的優位を占める。ネグロの中には獅子を殺した数ほど女房を持つことが出来たり、生蕃仲間では殺した人間の鬍髯を澤山腰にぶら下げて居る程女に持てたりするさうである。つまりネグロや生蕃の様に知識の低い野蕃人の社會に於ては、暴力が人間價値を定むる唯一の標準である。日本でも比較的教養の乏しいゴロツキや、博徒や、暴力團の間では、學問や、知識や、學士の肩書よりも、矢張り向疵や、入墨や、柔道何段の方が意張つて居る。

文明人と野蠻人との社會的意識の相違は、事物を道理に従つて解決するか、暴力

を以て解決するかの點である。今日文明國と稱せられる國に於ては個人間の係争紛議は、國家の權力を以てする裁判に依つて是非が決められ、個人各自の暴力を以てする直接解決を禁じて居る。禁を犯して暴力に訴ふる者は社會の安寧秩序を紊すものとして刑罰に處せられる。

素より裁判官と雖ども人間である以上、憎愛の感情もあれば、思想の賛否もあるその判決は必ずとも絶対公平とは言へない。罪もない人間を故意に三人も殺しても二三年の刑で済むこともあれば、短銃の空砲を放つて服の背を焦がした位でも終身懲役に處せられることもある。不服だからとて仕方がない。それが國家と國民との間の約束である。

然るに國と國との間の紛争に對しては今日未だ之を裁判すべき超國家的權力を有する機關がない。海牙仲裁々判所の如き和解機關は現存するも、判決に對して絶対服従を強ゆべき權力と實力とを有して居ない。若し其の判決に不服なる場合には、

最後の解決は矢張り暴力に待つ外はない。此の國際間に於ける紛争を暴力に依つて解決する方法が即ち戦争と呼ばれるものである。

既に戦争に訴へて暴力解決を期する以上、その主張が道理に合しやうと、合しまいと、正義であらうと、あるまいと、構ふことはない。所謂勝てば官軍で、戦争に勝つた方の主張が貫徹せられるのである。即ち暴力が是認せられるのである。故に現在の國際關係の下に於ては、非常に強大なる軍備を有する暴惡國があつて、最初から戦争を覺悟して掛れば、如何なる不義不正も押し通し得るのである。唯現代の國家中にはそれ程の強大國と、それ程の暴惡國とが現存しないといふことが世界の爲めに幸福である。

近世に於ける科學の進歩は駭々として殆んど底止するところを知らず、今や翼なくして空を翔り、口なくしてラジオが呻り、人間の自然征服時代など、已惚れて居る。此勢を以て進めば後世實に恐るべきである。併しながら一たび人間の精神方

面を顧みれば、道徳と云ひ、思想と云ひ、尙ほ甚だ低劣にして後世寧ろ悲しむべきの感がある。殊に國際間に在つては今尙ほ暴力至上の野蠻時代の域を脱せず、餌を争ふて咬み合ひ殺し合ふ動物社會と、其形に於て何の擇ぶところはない。

しかも動物は純である。彼等は其の餌を争ふに當り何等の言譯もせねば口實も付けない。然るに國家は其の餌を争ふに當りては必ず己の非を掩ふて他を責むることをする。動物に比して不純ではある。けれどもそこに幾分か良心の閃きが見ゆる。古來何れの戦争を見ても双方共に自國の正を唱へて居る。遠き昔を引かずとも、日清戦争然り、日露戦争然り、歐洲戦争亦然りである。中にも歐洲戦争は宣傳戦が激烈であつただけ、兩交戰國側共に此點に對して是も力を注ぎ、今尙ほ戦争責任者問題が論議せられて居る。第三者より見れば喧嘩兩成敗で誰か烏の雌雄を知らんと評するの外はない。

既に解決を暴力に訴へた以上、是非は何れにあるにせよ、敗けた方が損である。

獨逸は戦争開始の元兇と宣告せられ、數百億圓の賠償金を聯合國側より強課せられて居る。若し勝敗地を代えたなら金持の英國あたりが元兇と認められ、今の獨逸以上の悲運に陥つて居ることを疑はない。而して勝敗は道理の是非でなく、暴力の強弱である。暴力の語に弊があるなら戰闘力でも宜い。

斯様に暴力至上の世界に於て、力の弱き者ほど惨めなものはない。併合の言を用ゆれば強國は弱國を併呑しても世界は知らぬ顔をして居る。居留民保護の爲めと云へば、他國の領土へ勝手に出兵しても強國の正當權利ぢやと云ふ。抵抗もせぬ自國の人民を機關銃で塵埃の如く掃き殺されながらも尙ほ謝罪を要求せられることもある。共存共榮など、耳障りの良い甘言を聞かされながら、お前の物は安く賣れ、此方の品は高く買へと強いられることもある。

人種平等の叫ばるゝ今の世に於て列強は何の權利と理由とがあつて、支那の主權を蹂躪して片務的なる關稅制限や治外法權の存續を主張するのであらうか。戦争す

れば列國が強くて支那が弱いといふ事以外に何等の理由を發見することは出来ない  
 斯く考へると、現代世界に國家としての安全と正當の權利とを保つ爲めには、國  
 家の力は是非とも強くなければならない。然らば國家の力とは何であるかの問題が  
 生ずる。

## 第二章 軍備の性質

國家の力とは國家の戰鬪力である、他國の暴力に對抗して國家を防衛する力であ  
 る。故に國防力とも言ひ得る。

國家の戰鬪力とは戰時に於て、其國が戰爭に充用し得べき有形無形の總ての力で  
 ある。即ち海陸空の軍備は素より、百般の物資及人員を始めとし、農業、工業、其  
 他各種の生産業、鐵道、船舶、自動車、飛行機等の交通運輸機關、電信、電話郵便  
 等の通信機關の如き物質力は言ふ迄もたく、國土の地位面積、地勢の高低峻夷、海  
 岸線の長短、曲直、港灣島嶼の分布多少等の自然力より、更に國民の知識を高め精  
 神を養ふ教育、外國との同盟協調提携了解等を圖る外交の如き無形の力に至るまで  
 其の自然と人爲と有形と無形と直接と間接とを問はず、戰時、戰爭に使用し得べき  
 國家の有せる一切の力を總合したるものである。

例へば我國が金甌無缺三千年の國體を保ち得たるは四面環海の國土の位置が與つて力がある。元弘弘安に蒙古の難を防ぎ得たるは二百十日の氣象の力に待つところが少ない。那翁モスコの敗北は氣候の力に因ること大である。日英同盟が日露戦争に於ける我國戦勝の一因たりしことを否むことが出来ない。歐洲大戰に於て露國が單獨講和を爲したるは軍需缺乏の爲めであつた。獨逸が最後に屈服したるは食料缺乏の爲めであつた。佛國の急を救ひたるものはベルダン要害の賜である。獨逸潛水艦戦を失敗に歸せしめたるは聯合國の造船力である。

其他日本の海岸線の長さことは海防を困難ならしむるも、良港灣に富めることは海防を容易ならしめる。無軍備の支那が亡ぶべくして亡びざるは、其國土の大と民衆の多きとが大なる力である。米國が布哇を有することは國防上の強味であり、太平洋の大なることは海軍力の弱き日本に有利である。

國家の戰鬪力なるものは斯くの如く廣汎なるものである。故に國家の戰鬪力と軍

備との間には根本的の相違がある。軍備とは、平時に於て豫め國家の有する物と人との一部を割いて、之を戦争の目的に適する如く特別に制度し、組織し、構成し、編制し、教育し、訓練したる國家の一施設に過ぎざるものである。恰かも鐵道施設が、國家の有する物と人との一部を取つて、之を交通運輸の目的に適する如く制度し乃至訓練したると同様である。

或は此等兩者の間に規模の大小と任務の輕重の差があるかも知れぬが、兩者共に國家生活に要する一施設、國政運用に要する一機關であつて、同時に又國家の戰鬪力或は國防力を構成する一分子である。故に國家の戰鬪力即ち國防力なるものは軍備のみの専有獨占すべきものでない。軍備と國防力とを同一視するが故に、世間往々軍備の縮小を以て國防力即ち國力の縮少と誤解し、動もすれば軍縮論者を以て國家を衰亡に導く非國民など、憤慨する愚なる愛國者を生ずるのである。之を以て軍備は唯其の量を増すことに依つてのみ、直に國防力を増すものと斷定

することは出来ない。時としては軍備を縮少して其の餘れる人員を生産事業に轉用し其の餘れる經費を産業教育等に振り向けることに依つて、却て國防力を増す場合もあるのである。

斯くの如く、軍備は決して國家の戰鬪力を表示するものではないけれども、國家百般の施設や機關中、直接戰鬪に従事するものは軍備である。軍備は其國の武力である。或意味に於ては其國の武器である。個人の場合に於ても其の携帯せる武器の種類、大小、精粗、銳鈍等に依つて、概略的に其の人の戰鬪力を推測することが出来る。即ち彼が短銃を持つか、日本刀を持つか、出刃を持つか、棍棒を持つか等に依つて、大體彼の爭鬪力を知ることが出来る。軍備も亦之と同様に概略的に或は直覺的に其國の戰鬪力を表現せるものである。

若し嚴格に言ふならば、彼が果して其の携帯せる短銃を發射する知識を有するや否や、日本刀を振り上げる力を有するや否やが、彼の爭鬪力の根本であつて、中に

は短銃が毀れて居たり、日本刀が錆びて居たりするのがあるかも知れぬけれども、兎に角彼が短銃を携へ日本刀を提げて居ると云ふことだけで、多くの場合に於て他を威壓し脅迫するに充分な力となるのである。故に之を眞の戰鬪力と云ふことが出来る。來ぬならば、假りに戰鬪威力と稱へても宜い。

國家の戰鬪力も亦軍備を有効に活動せしむべき背後の力即ち主として經濟力の大小多少に依つて決定するものであるけれども、優勢なる軍備を有する國は大體に於て背後の力も亦大なるのが常である。併し之も個人の場合に於けるが如く、自國の經濟力の如何をも察せず、虚勢的に大なる軍備を張る國が無いとも限らない。斯様な場合に於ても、大なる軍備を有する國が軍備の小なる國に對して脅威を與ふることは、恰かも斬捨御免の幕府時代に於て、腰拔武士が「大小」の威力に依つて、丸腰の町人百姓に意張つたのと同様である。

國家が現代の世界に存立する爲めには大なる戰鬪力を有することが有利であり、

其の戦闘力なるものが軍備に依つて代表せられるならば、國家が軍備に重きを置くことも當然であらう。そして又大なる軍備を有する國は弱國を脅かして美味い汁が吸へるとすれば、心得の良くない國は文化施設を廢してまでも軍備の充實擴張に力むることも亦敢て不思議ではない。

### 第三章 戦争に勝つぬ軍備

小學校の生徒は、軍備の目的は戦争に勝つ爲めであると答へるであらうと言つた。若し之が戦前の軍國主義の獨逸や、帝國主義の日本の小學校の生徒であつたならば、國家の目的は戦争に勝つに在ると言ふかも知れない。

日本の小學校に於ける教育の根本主義は忠君愛國である。忠君愛國誠に結構である。併し日本の小學校教育に現はれたる愛國は極めて偏狹排他となり、愛國とは唯戦争に於て勇敢に奮戦し、壯烈に戦死することであるかの如く教へられて居る。國民としての最大唯一の義務は戦争に従事すること、靖國神社に祀られることが日本人の愛國心に描かれたる理想であるかの如く思はれる。即ち日本の一般民衆は愛國心とは戦時の特産物であつて、戦争以外には愛國心を發揮すべき場所もなければ必要もないかの如く思つて居るらしい。



政治が如何に墮落しやうと、政黨が如何に醜惡を極めやうと、粗製濫造が如何に國家の信用を害しやうと、そんな事は一切日本人の愛國心の關せざるところである。日常を取らねば選舉の投票場にさへ出遊ぶる人間でも、徴兵入營者を送くる爲めには數里の山路を遠はしとせざるだけの愛國心は持つて居る。彼等に在つては、國家は戰爭をする爲めに存在し、國民は戰爭に勝つ爲めに養はれて居る位に思つて居るのであらう。

國家の目的が戰爭に在りとする事は時代錯誤の軍國主義思想であるけれども、軍備の目的が戰爭に勝つ爲めと云ふことは儘に眞である。然らば戰爭に勝てない軍備がありとしたなら、其は何を意味するものであらう。

世界に國は多い。大は地球陸地の五分の一を占有せる英國から小は僅に十人の近衛兵に依つて守らるゝモナコ王國に至る迄、國と名のつくものは六十ばかりある。如何に強い者勝ちの現代世界とは云へ、是等の多數の國の中、互に利害關係のない

全然沒交渉の國の間には、戰爭の起ることは絶無と言つても宜い。戰爭は必ず互に重大なる直接の利害關係を有する國と國との間に起るものである。

例へば世界地圖現在の色取りの下に於て、四面銀海の日本と四面銀陸の瑞西やアピシニヤとの間には絶對に戰爭の起ることはない。假令戰爭をしたくとも第三國の領土に遮られて兵を用ゐることが出来ない。之に反し支那、露西亞、米國、英國、佛蘭西、和蘭などの諸國は何れも亞細亞若くは太平洋岸に領土を有して、日本と極めて密接なる利害關係を保つて居る。故に是等の國は動もすれば日本と戦端を開くべき機縁を有して居るのである。

そこで日本現在の軍備と戰鬥力を以てすれば、假令戰爭を開くも支那、露西亞、佛蘭西、和蘭に對しては萬々負けることはあるまい。しかし米國に對しては如何？英國に對しては如何？果して軍備の目的を達成して戰爭に勝つてあらうか。

現代戰爭の勝敗は決して軍備を以てする武力戦のみに依つて決するものでなく、

最後の勝を制するものは其國の戦闘力である。併し最初に行はるゝものは武力戦である。今日日本と米國又は英國との間に戦争起りたりと假定せば、武力戦の大局を制するものは地理的關係上海軍であつて、陸軍は局地作戦に過ぎぬであらう。そこで日英米の海軍力を現在の儘とすれば、主力艦の比率は三、五、五であるから、此比率を以て日本海軍が果して能く英米海軍を撃破し得るや否やは、戦争の數理上大なる疑問である。

日英又は日米戦争が持久戦的經濟戦となり、經濟力の弱きものが負けるといふことは世界識者の殆んど一致せる意見である。日本と英米と、何れが經濟力に富めるかは、如何に己惚強き日本人と雖ども恐らく其の判断を誤らぬであらう。日本の經濟的弱點は物質の貧弱なる點である。技術の低劣なる點である。重要物産が生活必需品にあらざる點である。而して技術の低劣を除くの外は改善すべからざる日本の不治の弱點である。

左れば假令武力戦に敗れずとするも、持久的經濟戦に敗ぶるれば、結局に於て敗は敗である。歐洲戦争に於ける獨逸が其の好適例である。然る時英米に對する限り日本の軍備は何の爲めかと云ふ疑惑が起らざるを得ない。殊に日本現在の軍備が米國を假想敵として計畫せられをものとせば、軍備は戦争に勝つ爲めといふ小學生の答案は正しいであらうか。

初めから勝てる見込のない喧嘩をやる程馬鹿氣たことはない。それも勞働爭議や小作爭議なら、假令負けても爭議幹部の解雇か、小作地取上げ位で済むであらうが國家の敗戦はさう簡單には済むまい。般鑑近く獨逸にある。

戦争に勝てぬ軍備！ がありとすれば、是は軍備の爲めに最も大なる負擔を負はされる無産大衆の最も考へねばならぬ問題でなければならぬ。元來争闘は生物の本能であるか、手段であるか、若し本能とすれば人類社會に於ける戦争は永久不滅かも知れぬ。併し争闘は必ずしも生物の本能ではない。唯其の

慾望を満たさんが爲めの手段に過ぎない。自己の慾望をさへ満たすを得ば、生存の危険を冒して迄も争闘を行ふの必要はない。假令國家の慾望は本能であるとするも之を満たすには必ず殺伐悲惨なる武力戦に依らねばならぬものであらうか。

昔の武士は「腰の朱鞘は伊達には差さぬ、人を斬る爲め、殺す爲め」と歌つた。武士が初めて刀を佩用した時代には社會の秩序も國家の威力も共に混沌として、人は自ら己を守る必要があつたのである。必ずしも人を殺す爲めでなくとも、己を守る爲め敵を防ぐ爲めの實際必要上、あの重い刀をイヤ／＼ながら差したのであらう之が朱鞘の第一期である。其後國家の権力が増進し、社會の秩序が整頓するに及びては、武士の帶刀は最早や防衛の必要物でなく、一面には階級を誇る裝飾物となり一面には下層階級に對する威嚇物となつたのである。之が朱鞘の第二期である。更に國家の制度が愈完備し、社會の秩序が愈安定するに至つては、腰の朱鞘は行動の邪魔となるばかりでなく、他人に脅威を與へて却て社會の安寧を害する無

用の長物となつた。それでも因襲の奴隸たる人間は尙ほ之を廢することを好まない日本に於ても明治の初年廢刀説を唱へたる爲め、頑固武士の憤激を買ひ、暗殺された者さへある。之が朱鞘の第三期である。

併し時は何物にも優る力である。曾ては男兒門を出づれば七人の敵ありなどと言つて、行住坐臥腰の朱鞘を離さなかつたテヨン鬚武士も、後には丸腰になつて「昔はようあんな重い大きな物を差して居たものぢや」など、涼しい顔して話して居た國家の軍備も全く之と同様で、最初は國際道德未だ起らず侵略御免の時代に於ける自己防衛の必要から生じたものである。それが今日では既に必要時代を過ぎて朱鞘なら第三期に入つて居る。軍備は文化國家の邪魔物たるばかりでなく、世界の平和を脅かす害物とさへなつて居る。あの化物の様な軍艦やタンクが古物博覽會の參考品となるのも甚だしく遠き將來ではあるまいと思はれる。

形式的とは云へ國際聯盟も出來て居る。氣分的とは云へ不戰條約も成立した。何

れも人類社會から殘忍酷烈なる暴力的武力戰を廢絶せしめんとする欲求の表はれである。而して此欲求は軍備に依つて最も大なる負擔を負はされ、戰爭に依つて最も大なる犠牲を拂はさるゝ無産大衆に於て、最も強烈に叫ばなければならぬ聲である。

#### 第四章 軍備に勝てぬ戰爭

中學校の生徒は、軍備は外國に對して國家を防衛する爲めであると言ふ。軍備は外國に對するものであつて、國內に對するものではない。暴動や内亂の如き國內の治安維持の爲めに設ける兵力は、それは軍備と稱するものでなく、警察力である。彼の關東大震災の當時、東京の治安と秩序とが軍隊の力に依つて維持せられたりとして、當時軍備の必要と效能とを宣傳する者があつた。一挺の小銃も、一個の爆彈も所持せぬ朝鮮人の影と噂とに膽を奪はれて、三萬五萬の軍隊を動かしたことは、軍隊としては名譽でもなく、國民として拭ふべからざる大耻辱である。是等は大杉を殺したからとて憲兵の必要を説くと同一の愚である。現代の軍備は外國を攻撃する爲めのものでなく、外國の攻撃に對して自國を防衛する爲めのものである。先爭國際聯盟に於て侵略戰爭が國際的罪惡と宣言せられて

以來、戦争は自己防衛の場合に限り正當行爲として認められるのである。従つて攻撃の爲めではなく、防禦の爲めである。尤もこゝに攻撃とか、防禦とか言へるは、兵學上の術語ではなく、政治的意義の言葉である。

侵略戦が罪惡であると云ふことは今更國際聯盟の宣言を待つ迄もなく、己に近代に於ける國際通念であつた。近代ばかりでなく支那の兵書には餘程昔から、名正しからざれば勝たすと云つて無名の師の慎しむべきことを説ひて居る。近代の戦争が何れも侵略の名を厭ふて自國を正義づけることに力めたるは前已に述べた通りである。如何に横暴なる國でも侵略を標榜して戦争を始めたるものは、那翁以來絶無である。今時他國の領土に涎を流す様なさもしい心掛の者は、日本ならば滿洲浪人位に過ぎぬであらう。そこで問題は「何をか侵略と云ふ」といふことである。國際聯盟は侵略の意義をば「國策遂行の爲め」と解して居る。國策遂行以外の戦争があるであらうか。若し無いとすれば總ての戦争は侵略戦となる譯である。

元來 侵略と防禦とは相互關係であると共に主從關係である。攻撃（侵略）があつて始めて防禦があるので、攻撃が無ければ自ら防禦も無い。即ち攻撃は主で防禦は従である。既に侵略戦なければ防禦戦もなく、戦争は自ら廢滅すべき道理である。然るに今の世界には戦争の氣運が尙ほ全く拭ひ去らない。最近に於ても支那と露西亞との間に戦争が勃發せんとした。抑々戦争なるものは何が故に起るのであらうか。戦争とは前に言つた如く、國家と國家との間に於ける爭議を暴力に依つて解決せんとする手段の現はれである。即ち國家間に於ける決闘である。故に國際間に何故戦争が起るかと言ふ問題は、個人間に何故喧嘩が起るかと言ふと同一の問題である。

個人間の喧嘩は法律に依つて禁せられ、犯すものは刑罰に處せられる。夫にも拘はらず世間には血塗れ騒ぎの絶間がない、其の原因としては欲の皮のつツぱり合ひもある、繩張りの争もある。男の意地づくともある。戀の嫉妬もある。そして斯

様な喧嘩は思慮の尙ほ定まらぬ若年者や、比較的教養の低き社會に於て最も多い。とは云へ、老人や有識者間には係争紛議がないのではない。彼等は唯之が解決を暴力に訴へないまで、年々裁判所へ持ち出さるゝ民事の訴訟は、二十萬乃至三十萬件に達するといふことである。若し裁判所が無かつたなら、是等訴訟事件の大部分は之が解決を暴力に訴へるであらう。

それが双方の誤解に基づくと又は一方の不正に由るとに拘はらず、人間社會には斯くも争の種子が多い。而して是等争の原因に種々ある中で最も多いのが物質欲の衝突である。前記民事事件の殆んど悉くが金錢其他物件の授受若くは處分に關する紛議である。而かも其の大部分は原被兩告何れかの故意の不正又は非法に因るものであると思へば、人間の性決して善ならずである。

人間の欲には殆んど際限がない。三井や岩崎の如く幾ら使つても使ひ切れぬ程の巨富を擁しながらも、尙ほも無産の勞働者を搾つて富の蓄積に餘念がない。斯様な慾張り人間に依つて支配せられるゝ國家なるものに慾の争の絶へぬことも想像せられる。

國家にも領土慾、利權慾、名譽慾、優越慾など種々の慾がある、個人にあつて國家に無きものは恐らく戀愛慾ばかりであらう、米國は世界の金の約半分を掻き集めながら、尙ほ貧乏日本の向ふを張つて支那で金儲に没頭して居る。英國は終歲日が没せざる程の領土を占有しながら、尙ほベルサイユ條約に於て獨逸の舊植民地を分捕することに遠慮をしなかつた。

國家の慾は時代に依つて變つて居る、上古は被征服國の住民と其財産とが國家慾の對照物で、領土などは征服者の眼中には無かつた時代もある。近世資本主義の勃興するに及びては、工業原料獲得の目的を以て土地が國家慾の對照物となつた。然るに各國の慾には限りがなきも、世界の土地には限りがある。世界の土地は今や悉く拾ひ盡されて、日本が後掛けに世界に乗り出したる時には、最早や拾ふべき粟粒

大の無人島すらもなく、サワラの沙漠までも所有者の棒杭が建つて居た。最近漸く資本主義に目覺めて領土慾に燃ゆる我國の帝國主義者等が、滿蒙西比利亞の地に色目を使ふのも無理ではない、歐洲戰爭の導火線たりし埃國皇太子暗殺が、セルビヤ帝國主義者の陰謀でありしことを思ふ時、張作霖の爆殺が第二世界戰爭の因とならざりしこそ日本の爲めに幸福である。

世界の土地を漁り盡して領土慾に行詰まりたる列國は、今や領土的侵略主義的帝國主義より經濟的資本主義的帝國主義に轉進しつゝある。現代の資本主義國家は最早や自給自足を以て満足するには餘りに胃擴張に罹り過ぎて居る、彼等は擴大したる胃の腑を満たす爲めに、他國の富を吸収するに汲々として居る。即ち資本主義に依る經濟の優越を争ひつゝある。

近世資本主義的産業の發達は大量生産を促進し、自ら之が販路を國外に求むるの必要を生じ、列國の間に市場の爭奪戰が行はれ始めた。かくて市場の獨占となり、

所謂資本主義的帝國主義を招致しつゝあるのである。歐洲戰爭は其の關係國が多かつただけ、之が原因も亦甚だ複雑多岐であるが、其の主なるものはバルカンに於ける露埃の政治的勢力の抗爭と、世界市場に於ける英獨の産業競争であつたのである。

領土慾であらうと、經濟慾であらうと、他國の壓迫の爲めに自國の生存が脅威せられる場合には、國家としても、國民としても、唯拱手傍觀して自滅を待つことは出来ない。我も亦自己生存の正當手段として之が對抗の策を講せねばならぬであらう。

思想には思想を以て戦へと云ふ、武力を以てする他國の領土的侵略を防ぐには、我も亦武力に依るの外はない。即ち軍備の必要がある。併しながら他國の經濟的壓迫に對しては、假令それが國家に取つて致命的のものであるにしても、武力を以て能く之を防ぎ得るであらうか。二十個師團の陸軍、六十萬噸の海軍を以てするも、

國産奨励の愛國心に訴ふるも、廉價良質の外國品を驅逐することは出来ない。ペルサイユ條約に依つて獨逸の軍備を極度に制限したる當年の聯合國も、世界に活躍する獨逸の産業を如何ともすることは出来ない。山東出兵で威しても支那の排日貨は益激化するばかりであつた。然る時産業を以てする現代の經濟戰に對しては、如何なる力を以て國家を防衛すべきであらう？。それが決して軍備でないことだけは明らかである。

### 第五章 軍備は戰爭を激發す

高等學校の學生の或者は軍備は平和の保障であると言つた。多分軍事訓練の教官からでも教へられたのであらう。

前世紀の末頃、有名なる「海軍權力史論」の著者米國海軍大佐マハン氏が一たび「軍備は平和の保障なり」と唱ふるや、當時尙ほ侵略的帝國主義の旺なりし頃とて、忽ち時人の共鳴を博し、政治家は演壇より叫び、教育家は教壇より説き、中にも軍國主義者等は恰も天の福韻かの如く隨喜し、軍備擴張演説の金科玉條として盛んに振り廻はしたものである。

此格言を最も深く信じ、最も忠實に實行したるものが獨逸廢帝「ウイールヘルム」二世である、彼は平和の保障と稱して無茶苦茶に海軍の軍備を擴張し、其の結果遂に軍備に崇られて帝位を捧に振るに至つた、而かも尙ほ迷の夢覺めぬと見へ、今で



も和蘭の配處から「軍備は平和の保障なり」を唱へて、軍縮會議にケチを付けて居る、日本に於ても元帥などいふ古色蒼然たる老軍人や田舎廻はりの思想善導業者の口から折々此の古き言葉が今尚ほ聞かされる。

一體軍備は果して平和の保障なのであらうか。もし然りとすれば世界平和を目的とせる國際聯盟などが躍起となつて軍備の縮小を唱ふるのは何故であらう。

軍備は平和の味方なのか、敵なのか。

軍備の目的は戦争に勝つ爲めであつた。少くも戦争に備ふる爲めである。戦争と平和とは氷炭相背き、水火相容れぬものである。戦争の爲めに設けたる軍備が平和を保障するなどは、夜廻りが火付けをする以上に受取れ難き話である。マハン大佐は如何なる論據の上に立つて軍備は平和の保障と言つたのであらう。

人間は喧嘩をしながらも命は惜しい。其の證據には負けさうになると逃げ出す。口でこそ斃れて後已むなど、元氣なことを言ふけれども、眞にブルドックの様に斃

れても已めぬ人間は極めて稀である。若し相手が非常に強くて最初から迎ても勝てないことが判つて居る時には、賢い人間は喧嘩をやらない、大概な事は相手の言ふことを承認するか、又は泣寝入りをする。昔から鼠が猫と喧嘩をした話を聞かない。

國家としてしも其通りで、戦闘力軍備に大なる相違のある場合には、小軍備を有する國は大軍備を有する國に對しては戦争を断念する。例へば支那が日本の山東出兵に對して大なる不平を唱へながらも、日本に對して断然戦争を開始し得ざる様なものである、之と反對に若し支那が關東震災當時に於ける支那人虐殺を口實として東京に出兵したとしたら、日本は戦争に訴へずして泣寝入をしたであらうか。マハン大佐の言ふ平和とは支那の隱忍状態を指すのである。斯くの如き強者の横暴に對する弱者の屈辱が果して平和と言へるであらうか。

是れ軍備は平和の保障でなく、強者横暴の保障に過ぎない。

人間の冒險心は其の危険の程度に反比例する、非常に有利なる仕方でも、危険率が大なれば、人は其の實行を躊躇する。戦争は國家の最大冒險事である。一たび敗ぶるれば國家百年の衰亡を招く。故に相手國が相當の軍備を有し、勝つか負けるか判らぬ様な場合には、大概な争議は戦争に訴へずして外交的に解決するのが常である。是の如きは或は軍備は平和の保障と言ひ得るかも知れぬ、之を武装平和と云つて居る。併しながら多くの場合に於てはそこに必ず強者の不法非理が潛んで居る。斯様な平和とても唯程度の問題である、國家の生存に關する場合には勝敗を度外にして戦争を行ふこともある。又假令國家の生存に關せずとも、國家的投機心に依つて戦争を始めることもある、定遠鎮遠も日支の平和を保障し得なかつた、露西亞の大軍備も日露戦争を防ぎ得なかつた。歐洲戦争に至つては流石にマハン信者のカイザーの國だけあつて軍備の擴張も徹底して居つた。火の出る様な英獨海軍々備の競争、露佛對獨塊の陸軍々備の對抗が遂にあの大戦争を捲き起した。

斯くの如くマハン大佐が十九世紀の末に「軍備は平和の保障」を叫んで以來、各國の軍備は遺憾なく充分に擴張せられた。しかも軍備は少しも平和を保障しなかつたのみならず、寧ろ戦争を激發さへもした。

然らば軍備は何故に戦争を激發誘起するか。

軍備は戦争が目的である。假りにマハン大佐の言へる如く平和の保障となることありとするも、それは結果から見ての議論であつて、最初から平和を目的として軍備を設置する國はない。氷は冷たいものであるといふことの爲めに、人は氷を見たばかりで冷涼の氣を感じ起す。之と同様に、軍備の目的が戦争であるといふことの爲めに、國民は軍備の聲を聞き、軍備の形を見る毎に戦争を想起する。觀兵式や觀艦式が國民の士氣即ち戰鬥精神を昂進せしめるのは此が爲めである。

軍備は物と人とに依つて成つて居る、故に軍備を強くする爲めには是等の兩要素を強くすることが必要である、そこで人的の力を強くするには、國民の精神力を強

くすることが肝要である。之が爲めには力めて國民の愛國心や敵愾心を刺戟せねばならぬ。節制なき愛國心や敵愾心は排他的となり排戦的となり、他國民との感情を疎隔せしめ、延ひて國際の協調を害する。殊に假想敵國間に於て其禍害が最も烈しいのが常である。

軍備の物的要素を強くする爲めには他國との間に自ら艦船兵器等の競争が起さる軍備の競争が如何に兩國民の感情を悪化せしめ、國交を危ふせしむるかは、歐洲戰爭前に於ける英獨の海軍競争や、華府會議以前に於ける日米の海軍競争の激烈なりし當時の實情に照らして明らかである。曾て日米戰爭不可避説の高かりしは移民問題よりも寧ろ海軍競争の爲めであつたのである。華府協定以來日米戰爭の聲が聞へなくなつたことが之を證明して居る。

現代の軍備は戦艦一隻の建造に數千萬圓を要する如く、莫大の國費を要する。之が爲め國民の負擔多大となり、その平和生活を脅威すること大である。殊に軍備の

競争烈しきに於ては、負擔は益々加はり、國民は益々窮迫し、爲めに自國の事は棚に上げ、相手國に對する怨恨を増すに至る。

大なる軍備は自ら國民をして之に對する依頼心を起さしめ、動もすれば他國に對して不法の行動に出づることがある。

小人罪なし、玉を抱いて罪ありと言ふが、柔道家が人を投げて見たくなる、雄辯家が演壇に立つて見たくなるのは人間自然の情である。國家も強い軍備を有すると之を使用して見たくなり、自ら戰爭を求め様なことが無いとも限らない。戰爭を生命とせる軍閥専權の國に於ては殊に其の傾向が著しい、寺内内閣の西比利亞出兵田中内閣の山東出兵の如きも大に其の嫌が無いでもない。

以上は軍備が戰爭を誘發するといふ理由である。之でも尙ほ軍備が平和の保障と言へるであらうか。

世界は過去約半世紀の間、マハン大佐の言を信じて幾たびか苦き經驗を嘗めた、

之に依つて世界は今や軍備が平和の敵なることを覺つて、世界平和を目的とせる國際聯盟が平和達成の政策として、軍備の縮小徹廢を擇びたるは慥かに賢明にして適正であると言はねばならぬ。

日本の軍國主義者等が軍備を國寶視して四外一國論の叫び、軍縮運動を危険思想と誣ひたところで、平和は現代人の慾求である。顧みれば尾崎學堂氏が我國に於て初めて軍備縮少を唱へて頑限派から國賊視せられ、東京驛頭暴漢に襲はれたりしたのは、僅に數年前に過ぎない。然るに今や、マハン信者の軍事當局者ですら、内心はイザ知らず表面だけでも「衷心より軍縮に賛成す」などと言はなければ、世間が渡れなくなつたかと思へば、世相は暗黙の裡に案外速に遷移しつゝある。

併し夫れは人間道義心の進歩に由るものであるか、或は又國家の利害關係に基づくものであるかは尙ほ大なる注意を要する問題である。支配階級者が動もすれば國家を以て自己の營利機關と心得て居る今日、彼等に依つて運用され操縦せられつゝ

ある國際聯盟や外交機能が、どの程度まで道義的に軍備を禍害視し、思想的に平和を好愛せるかは、尙ほ充分疑ひの餘地がある。國家を以て自己生活の機關と爲す無産大衆が戦争非認、軍備不要と目覺めたる時こそ、眞に國家廢刀の實行せらるゝ可能がある。

## 第六章 軍備は無産階級の負擔

四六

社會科學派の大學生は、軍備は無産階級の膏血に依つて資本主義的帝國主義を擁護する爲めであると言つた。流石に大學生となると答案も亦むづかしくなり、軍人上りの著者にはちと判りにくくなつて來た。

先づ第一に軍備は無産階級の膏血に成るものであるか否やが研究の問題である。軍備の要素は之を大別すれば物的と人的との二つである。物的とは艦船銃砲を始めとして百般の兵器並に軍需品である、人的とは上元帥より下一卒に至る迄軍隊を組織せる人間である。之を産業に當て嵌むれば、物的要素は機械原料等の資本關係である。人的要素は物的要素を操縦運用する頭腦並に體力の勞働關係である。而して是等の要素の結合に依つて生ずる生産物が、或は國防であり、或は戦争である。故に軍備も亦他の一般産業同様に資本と勞働との結合である。唯異なるところは

資本が國家の監理に屬すると、勞働が全國民的強制制度なる點である。

軍備の資本は國民の租税から成つて居る、租税の負擔者は有産者であるか、無産者であるか。概念的に於て、國費の少くも九割は無産階級の負擔であるとするならば、軍備の資本の九割は無産者の負擔である。

軍備の勞働は將校階級に屬する少數の頭腦勞働を除くの外は、徵兵規則に依つて全國民から強徵せられて居る、是れ亦國民の九割以上が無産階級たる點よりして無産者の負擔である。しかも無産者と健康、知識と職務等の關係を考慮せば、體力勞働者の殆んど全部は無産者と云ふも甚だしき誤りはないであらう。

世間では納税と兵役とを國民の二大義務と稱へ、殆んど同格に扱つて居る觀がある。併し此の二つの義務には本質的な相違があることを記憶せねばならぬ。

租税は富者に重く、貧者に軽いと云ふ所の不平等負擔である。此の不平等の理由に富者は其の生活の上に於て國家の恩恵に浴すること厚く、貧者は薄さが爲めである

即ち富者は貧者よりもより多く國家の世話になり、より多く國家に厄介を掛けるが故に、其の謝禮としてより多くの租税を納めねばならぬのである。故に租税は奉任でなく謝禮である。然るに彼等富者は多額の税金を納めるが故に、貧者よりも餘計に國家に奉公せる如く誤解し、國家を我物顔にして横暴を働くのみならず、兵役の如きは税金を納めぬ貧乏人の義務と心得て居る。

兵役は全國民必須の平等義務である、少くも法規の上に於ては！、而して夫れが果して名譽であるや否やは知らぬが、國家に對する純然たる犠牲的奉任義務であるしかも其の義務たるや富者の金税に幾倍する苦痛の義務である。國家に厄介を掛けること最も少くして國家に奉仕すること最も大なる無産階級の負擔も亦重い哉である。

軍備の要否や徴兵制度の可否は別とし、現制度の下に於て兵役に徴せられる者に對しては、國民就中無産階級は最も深き同情を表せねばならぬと信ずる。

由是觀之、軍備といふ國營の不生産的産業は無産階級より徴集したる資本と、無産階級より召集したる勞働とに依つて組成せられたるものと云ふも概念的には誤つて居ない。

次の問題は、軍備は資本主義的帝國主義を擁護する爲めのものであるや否やである。

資本主義的帝國主義とは、之を一口に言へば、自國産業の生産品に對して世界市場の獨占と云ふことであると信ずる。

獨占とは排斥である。事物の何たるを問はず、他を排するには必ず何等かの力を要することは天地自然の公理である。市場を獨占する爲めには茲に二つの力がある即ち其一は經濟的自然力で、其二は武力的強壓力である。前者は良品廉價の經濟手段に依つて自然に他を驅逐することである。後者は陸海軍の武力強壓に依つて獨占の特權を占得ることである。

良品廉價の經濟力に依らんとすれば、之が爲めに生ずる負擔の全部は産業關係者就中資本家が負はねばならぬ。然るに武力の強壓に依つて特權を獲得するには、之が爲めに生ずる負擔は國家即ち無産階級が負はねばならぬ。そこで狡猾にして貪欲なる資本家は自己の負擔を輕からしめんが爲め、國家政府を強要して武力的強壓に出でしめんとする。産業未熟にして經濟的競争を爲し得ざる國に於て特に此傾向が強い、斯くて國家政府は資本家の要求に應ずる爲めには武力即ち軍備を擴充せざるを得なくなる。

こゝに資本主義と軍國主義との握手がある。

産業は資本主義國家の生命を維持する血管で、生産は血液である、生命を維持する爲めには血液の循環を良くして動脈の硬化を防がねばならぬ。そこで國家は市場を獲得保護する爲めには有ゆる手段と方法と力とを用ゐることを厭はない。然るに世界の市場には限りがあるも、資本主義國家の欲望には限りがない。各國にして互

に反省自制するにあらざれば、早晚武力の衝突は免れない。是れマルクス派が資本主義的帝國主義が早晚戦争に歸決するといふ所以であらう。

併しながら前後五年に互る歐洲戦争の苦き且尊き體驗は、無産階級をして戦争に對する自己の地位を覺らしめたと共に、資本家をして現代の戦争は假令勝利を得るも何等益するところなきを知らしめた。

戦争は遊戯にあらず、スポーツにあらず、國運を賭する決闘である。其の目的は勝つて利益を得んが爲めである。而かも勝つて利益を得ずとすれば、戦争なるものは消費と殺戮との自己破壊に過ぎない、資本階級としても、無産階級としても考へざるを得なくなつた、自覺したる労働者は資本家の走狗となつて、再び人間屠殺の事業に従ふことを拒むであらう、思慮ある資本家は露國の革命を對岸の火災と冷眼視し得ぬであらう。以前の戦争は投機であつた。當らねば破産をするが當れば莫大なる利益を得た。併し今後の戦争は三階から飛び下りの冒險である、失敗すれば生

命を失ふ危険がある。而かも成功したとて何の利益もないのみならず。多くの場合に於ては多少の怪我までして、世間の物笑ひとなるに過ぎない。

かくて國家は始めて侵略主義の悪夢より覺め、國民は始めて武装平和の虚偽を知つた。そこで新に起つたのが細張尊重の現状維持である、原狀維持には武力の積極的活動を要しない、軍備縮少は自然の聲である。

現状維持は既成國家には有利であるが、未成國家に取りては進路の遮断である。資本主義の未だ熟せざる日本が動もすれば現状維持に不満にして軍縮に乗氣にならぬのも無理ではない。

## 第七章 軍備は國際惡の支持者

其の動機と目的の何たるを論せず、今日軍備縮少に對して表面より反對する國は全世界を通じて唯の一國もない、然るにも拘はらず容易に實行の出來ないのは、そこに何かの重大なる理由が無くてはならない。各國の軍備縮少賛成には必ず「國家の安全を害せぬ限り」といふ條件が付いて居る。此の「國家の安全保障」が軍備縮少を實行難ならしむるところの癥である。之を取り除かざる限り意義ある軍縮の實行はむづかしいであらう。

然らば國家の安全とは何であるか、今日如何なる野心國と雖も、他國の領土に對して侵略欲を逞しうせんとする如きは絶無と云つても恐らく差支はないであらう。又左様な野心が到底成功せぬことは、世界第三位の大軍備を擁した前田中内閣の滿洲積極政策の聲明が、殆んど無軍備同様なる支那國民の逆襲に逢ふて、あはれ霧の



如く煙の如く消へ去つたことに徴するも明らかである。

既に國際の間に領土的不安が無いとすれば、次の不安は經濟的不安である。農業的自給自足の舊殻を脱して資本主義の産業世界を作り出したる現代の國家は、最早や自國の國土のみに依つては到底生存することは出来ない。米國の大と富とを以てするも、鎖國三年すれば恐らく國家としての生活機能を喪失するであらう。殊に日本の如く土地狭小、物資貧弱、僅に他國の原料と、他國民の懐とに依つて生活せる國に在つては、外國との通商關係が國家の生命である。世界が其安全を保障せぬ限り、國家は自力を以て之を保護せねばならぬ。茲に於て國家は他の妨害を排除する爲めに常に必要なる實力、即ち軍備を有せねばならぬこととなる、是れ列國が口に軍備の縮少を唱へ、心に之を欲しながらも、尙ほ斷行に怯なる所以である。

併しながら更に冷靜に世界の實際を顧みると、現在の世界は夫れ程不安なものではない、今日國家の安全を口實にして尨大なる軍備を擁し、世界の平和を脅威せる

國は所謂五大國とか稱する極めて少數の國家であつて、爾餘の大多數の國の軍備なるものは極めて微弱なるものである。

故に武力を以て争はば此等小國は大國の一撃に依つて粉碎せられ、所謂鎧袖一觸に値せぬかも知れぬ、然るに斯かる小弱國が歐洲大國の間に於てさへ、何等の不安なく獨立國家として堂々自立して居る。もし大國が言ふ如く、然かく世界が不安なるものであるならば、此等小國は一日として晏如たることを得ず、國民は恐外的神經衰弱に陥らねばならぬ筈である。六千海里の太平洋を距つる米國が軍艦一隻造つたと言つては神經に病む日本人の頭を以てすれば、日本の目の前に廣大なる南洋の妖土を投げ出せる和蘭の如きは心配のあまり發狂するであらう。

惟ふは是等無軍備の小國が大軍備を有せる大國と伍して何等の危懼を抱かず生存し得る所以は、畢竟するに彼等が國際的非理不法を行はぬが故である。現代の國際道德尙ほ低しと雖ども、罪もなき人間の頭を擲らぬだけには進歩して居る。之に反

して大國なるものが強大なる軍備を有しながら、尙ほも他國の軍事豫算をまで頭痛に病んでビク／＼する所以は、彼等が過去現在に於て國際罪惡を犯したるか、犯しつゝあるか、或は未來に之を犯さんとする野心あるが爲めに外ならない。

今日大國と稱するもの、殆んど全部は、他人の國家を武力によつて征服占領し、其住民を搾取して自國の腹を肥やして居るのである。斯かる國際的不道德を行ふ爲めには、或は之を繼續する爲めには、軍備は必要かも知れぬ。例へば列強なるもの多くは支那に於て今尙ほ大小何等かの特權を持つて居る。しかも此等の特權なるものは、國家對等の立場よりして果して正當なるものであるや否や。治外法權と云ひ、制限關稅と云ひ、租借地と云ひ、内河航行權と云ひ、支那に對して片務的不平等義務を強課せるものである。支那が之を對等相互的に改正せんと主張するは當然である。列強は支那の此の正當なる要求を拒絶する爲めに武力の必要がある。人を呪ふは穴二つと云ふ、列強が今日軍費の負擔に苦しんで居るのも自ら招ける禍であ

る。

最近支那國民政府の東支鐵道暴力回收などは、革命成功の餘勇とは云へ、隨分思ひ功つた亂暴行爲である。之が爲め露支國交は斷絶して戰雲將に北端の空に漲らんとして居る。假令曲は支那にあるとしても、もと／＼他國の領土内に自國の鐵道を施設するといふことが、己に大なる無理である。國際間に斯様な不平等や無理が平然として存在する間は、世界の眞の平和も無ければ従つて軍備縮少の實行も覺束ない。

之を以て現代の軍備なるものは「國家の安全を保障する爲め」といふ口實の下に其實は強國の國際惡を支持擁護する爲めであるとも云ひ得るのである。

國際聯盟は軍備縮少を説く前に、先づ強國の武力に依つて支持されてゐる世界の不正義不平等を取り去ることが必要である。併し國際聯盟の實權が此の不正義に依つて利益を得つゝあるブルジョア國のブルジョア政治家に依つて握られ居る間は

之が實現は到底不可能であらう。一方に國際間の不義不正を是認しながら、他方に世界平和を唱ふるなどは恰も社會の不合理を其まゝにし國民思想を取締らんとすると同様の愚昧で、一はブルジョア國家、一はブルジョア階級の利己的錯覺である之も最近の外電に依ると、佛國外相ブリヤン氏は歐洲聯邦の組織を計畫して居るといふことである。其の目的や其形態は未知であるけれども、少くも國家以上の權力を有するものであらうと思はれる。その現實の如何に拘はらず、現代政治家の頭がそこ迄動いたと云ふことは慥かに國際思想の一進歩と云ふべきである。不正國家横暴國家を處罰する超國家權力の出現する時こそ、世界の平和の殿堂に向つて數歩を進めたものである。而して斯かる權力は世界の無産者が平和に覺醒したる時に於てのみ實現するであらう。

或學者は國家は最高の道德なりと云ひ、國家の爲すところは總て善であると説いた。佛蘭西革命の時ローラン夫人はギロチン臺上から「嗚呼自由よ、汝の名に依

つて如何に多くの罪惡が行はれつゝあるよ」と叫んだ。我々は「嗚呼國家よ、汝の名に依つて如何に多くの罪惡が行はれつゝあることよ」と叫びたい。抑々國家とは如何なるものであらうか。

無政府主義者の「クロボトキン」は國家を解説して次の如く言つて居る。

「國家といふことは戦争と略ぼ同意義である。國家は他の國家を占領し、之を滅亡させ、自國の法律政治通商條約等の強要し、他國の犠牲に依つて自ら富まんことを力めて居る。

本來萬人殊に弱者の保護者たるべき國家は被掠奪者に對する富者の武器となり、無産者に對する有権者の武器となつて居る。」

總ての國家が然るや否やは知らない。併し現代の國家の中にも之に適合する國家が無いでもない様である。もし國家なるものが果して斯様なものでありとするならば、此の國家の意思を遂行する爲めには大なる暴力即ち軍備を有せねばならない

然る時其の軍備は大学生の言ふ如く、資本主義的帝國主義を擁護遂行する爲めとも言ひ得る。

必要不必要の議論は別とし、現在多くの國家殊に大國なるものは何れも強大なる軍備を張つて居る。そして軍備の負擔は物的にも人的にも、其の大部分を無産階級に負はされて居ることは前述の通りである。しかも其の負擔たるや無産者に取りては、極めて重且つ大なるものである。中にも徴兵制度國に於ける兵役は無産者の爲めには、堪へ難き經濟的苦痛である。

茲に於て疑が起らざるを得ない。即ち軍備の爲めに大なる負擔を荷ふ大國或は強國なるもの、國民と、軍備の負擔輕き小國の國民と、無産者として果して何れが幸福であらうかと云ふ問題である。抑々戦時に於て國民が國家より受くる恩惠(?)は何である(?)。特權特典を有せる所謂特權階級は別とし、一般民衆が國家より受くる恩惠は生命財産の保護である。財産なき無産階級に取りては唯生命のみである。

昔は戦争に敗けると、國民は敵軍の爲めに殺戮せられるか、奴隸として酷使せられるかであつた。故に一朝戦争が起れば全國民は戟を取つて起ち、自己の生命と自由とを擁護するために戦はねばならなかつた。即ち戦争は直接自己自身の爲めであつた。然るに現代の戦争は國際法規に依つて敵國人と雖も、個人の生命を尊重せねばならぬことになつて居る。故に戦争に敗けても個人の生命までも奪はれる心配はない。之と反對に幸に勝つたところで、從軍者が勳章でも貰ふ位の外、一般無産者は何等の利益をも蒙むらない。歐洲戦争の結果、勝つた聯合國則の無産大衆が敗けた同盟國側の無産大衆に比して、ヨリ多く幸福であつたといふことを聞かない。して見ると無産階級なるものは、戦争の勝敗と極めて縁の遠きものである。戦争と無産階級とが没交渉、否な戦争の勝敗が無産階級と無關係なることは、著者を待つて始めて知る譯ではない。歐洲戦争以前に於て第二インターナショナルは「戦争は資本家と資本家との戦である」として戦争反對の決議を行つた。然るにも拘

六二  
はらず歐洲戦争一たび勃發するや、各交戦國の社會黨員の多くは忽ち主戰主義に豹變して、曾て仇敵視したる自國の資本家と握手し、昨日の同志たる敵國の無産階級に對して銃口を向けたのである。而して之に依つて無産階級の得たるところのものは何であつたらうか。唯歐洲の山河を朱に染めたる敵味方の無産階級何千萬人の碧血ばかりであつた。世界の無産階級は最早や再び此愚を繰り返へさぬであらう。受益者は常に現状維持を好む。女郎屋の親父に依つて廢娼は望まれない。軍備の撤廢や戦争の廢絶やは非受益者たる無産階級の力に依つてのみ、始めて實現の可能性がある。

## 第八章 軍備の變遷と無産者

往古人智尙ほ幼稚にして武器未だ發達せず、木槍石鏃を以て戦ひたる時代に於ては部落皆兵であつた。敵襲一たび到れば苟くも武器を執つて起ち得る者は悉く戦争に従事したのである。是れ當時に在つては木を削れば槍となり、石を割れば鏃となり、武器の製造竝に其の用法共に簡單容易にして、何人も之を造り之を用ひ得たからである。故に此時代に於ては兵農一元で、天下事有れば武器を執つて闘ひ、天下事無ければ鋤を執つて耕やしたのである。無論社會は共產經濟で、資本階級も無産階級もなく、戦争は直接に自己自身の爲めであつた。

其後人智の進むに従ひ、武器も亦發達して銅器時代となり、鐵器時代となり、幾多の研究と實驗とを経て、中世の頃に至つては攻むるに斷鐵の利刀あり、防ぐに彈矢の堅牢あり、之が製法用法共に漸く複雑困難となるに至つた。而して當時工業尙

ほ極めて幼稚なりしが爲め、是等の武器製造には多くの時日と特別の技能を要し、従つて其の生産は極めて少く、國民全部の需用を充たすことが出来なくなつた。同時に武器の使用にも大なる訓練を要し漸次専門的技術となつて來た、かくて國民中には武器を有するものと有せざるものとの二階級を生ずるに至つた。

一面には人口の増加、交通の發達等により異民族や他部落との接觸交渉漸く頻繁となり、攻伐闘争も亦次第に多くなつた。然るに精銳なる攻防の武器を有せざる者は之を有せる者に對して到底抗戰の力なく、有武器階級のみが出でて戰闘に従事し、無武器階級は退いて農業に就くこととなり、こゝに自ら兵農二つに分れて遂に封建の時代を作るに至つたのである。而して暴力尊重の時代に於て、大なる戰闘力を有せる有武器階級が社會の上部に立つて支配階級となる、無武器階級が被支配階級となつて社會の下積に沈澱したることは、恰も資本萬能の現代に於て、資本を有する者が支配階級となり。有せざるものが被支配階級となれると全然同一の理である。

降つて第十六世紀の頃に至つて歐洲に於て初めて小銃が發明せられた。小銃の發明こそは實に世界軍事界に一大革命を齎らしたもので、之が爲の刀鎗甲冑の舊式武器は戰場より驅逐せられ、貴族主義特權主義の階級的封建軍備は崩れて今日の國民皆兵の平和的軍備を現出せしめ、その餘勢は遂に封建制度を迄も覆滅して、立憲政治の建設を見るに至つたのである。小銃の發明ぐらい社會の大變動を誘起したるものは蓋し稀であらう。

小銃の出現に依つて第一に其の存在の價値を失ひたるものが、封建武士の祖先傳來の家寶として尊重したる甲冑であつた。一寸の強弓に裏さへ搔かぬ南蠻鐵の黒威も、小銃彈の前には哀れ紙襖の如くゾブリと貫かれて仕舞ふ。かくて護身の甲冑も今は却つて手足纏ひの厄介物となつた。甲冑と同時に存在の生命を絶たれたるものが、打物取つては百人力、千軍萬馬の古つはものであつた。一騎當千、鬼をもひし

い勇士も、百姓の小作が遠方より放つ小銃の一種には脆くも斃れざるを得なかつた抑々封建の武士が社会に重きを置かれたる所以は、唯彼等が有せる堅銳の武器と、熟達の武技とである。彼等より此二ツのものを奪ひ去れば、戦士として彼等の價値は百姓町人と何の異なるどころはない。

封建社会が世襲の高祿と切捨御免の特権とをさへ與へて、武士階級を優遇したる所以は、唯彼等を戦争に使用せんが爲めである。然るに若し百姓町人の子を召集して一二年の間小銃の訓練を授ければ、立派に古武士を相手に戦争の役に立つとすれば、生涯高祿を食まして武士を養ふ必要はない。殊に機械工業の發達は小銃及彈丸の生産を多量ならしめ、之が供給の容易なるに於ておやである。

明治維新第二長州征伐の際、鎧甲に身を堅め旗物差を押し立て、長州に攻め寄せたる幕府方の舊式武士軍が、高杉晋作の率ゐたる洋装携銃の長州奇兵隊の爲めに散々打敗られたるこそ、我國の武士階級に對する事實の上の失業の宣告であつた。

かくて武士本位の封建的軍備は自然に崩壊し、徴兵制度或は傭兵制度と相待つて民衆的軍備が起つた。即ち軍備の民衆化であり、無産階級化である。

斯くの如く封建制度は特權的武器たる甲冑に依つて促成せられ、甲冑を打碎したる民衆的武器なる小銃に依つて破壊せられたのである。

現代の資本主義制度即ち金權政治は個人資本の尊重乃至威力に依つて形作られたのである。將來此制度に取つて代はるものありとすれば、それは個人資本の威力を打破するものでなければならぬ、敵を覆へすには敵の根據を衝くことが戦術の原則である。現状を打破する爲めには、現状の因つて來れるところを究めて、其の根底を破らねばならぬ。

## 下篇 現代軍備論

### 第一章 現代軍備と戦争

こゝに更めて「軍備とは何ぞや」と云ふ問題を提起する。

軍備とは之を字解すれば、軍は戦争を意味し、備は準備を意味する。即ち軍備とは戦争に對する準備であることは、何人も概念的には之を疑はぬであらう。然るに一九二六年ジュネーブに於て開かれたる國際聯盟主催の第一回軍備縮少準備委員會に於て、佛國委員より「軍備とは何ぞや」といふ問題が提出せられた、世界各國の學者、政治家、軍人などの權威を集めたる此會議に於て、今更斯かる中學校の試験問題めいたものが提出されようとは、恐らく何人も豫期しなかつたところであらうと思ふ。ところが尙ほ驚くべきは、此簡單明瞭にして小學校生徒と雖ども容易に答



へ得る如き問題に對し、各國委員の間に大なる意見の相格を生じたことである。國際聯盟生れて既に數年、その間軍備縮少に關して屢論議せられたが、此根本問題が未だ決定して居なかつたのである。

此の軍備準備委員會に於ける「軍備とは何ぞや」の問題に對し、提案者たる佛國委員は、軍備を以て國家が戰爭に利用し得べき總ての物力と人力との總和であると解釋した。之に對して英國委員は、軍備とは國家が戰爭に用ゐる目的を以て平時に於て特設せる武力であると解釋した。而して伊太利は佛國説に贊し、米國は英國説を支持したるが、討議の結果、軍備を平時兵力と戰時兵力とに區別し軍備縮少は専ら平時兵力に對してのみ行ふと云ふ極めて妥當なる折中説に落ち付いた。本書に於て軍備と稱するのは専ら平時兵力に就いて謂ふのである。

尙ほ之を法律的に言へば、軍備とは國家の政治に於て軍事官憲の管轄に屬する、或は又國家の財政に於て軍備費の項目に依つて經濟せられるところの軍隊、軍艦、

艦船兵器火藥等の製造所、軍港、要塞等の如き、専ら戰爭のみを目的とする諸施設諸機關を謂ふのである。されば假令直接若くは間接に戰爭に關係を有するとも、戰爭を目的とせざるものは軍備と稱するを得ないのである。例へば鐵道は戰時軍隊軍需の輸送を行ひ直接戰爭に關係することあるも、國家が鐵道を敷設したる目的は交通運輸の便を圖り、國民の日常生活を利せんとするにある。故に之を軍備と稱するを得ない。又演習檢閲等の際、學校が軍隊の宿舎になつたからとて、或は民間の造船所に於て軍艦を製造したからとて、之を軍備と云ふことは出來ないのである。軍備は前述べた如く、物的、人的の二要素から成つて居る。人的要素は軍隊である。現代各國の軍隊は日佛の如く徵兵制度であるか、英米の如く志願兵制度であるかの二つである。英米と雖ども戰時に際しては徵兵制度を採ることもある。徵兵制度は四民平等國民皆兵の精神に出づるとは云へ、實際に於ては各役に徵集せられて國防の任に服する者は、全國民男子の十分の一にも達せぬのが普通である。元來戰

争は國家對國家、國民對國民の決闘である。併しながら歐洲戦争以前に於ける戦争は交戦國全國民の決闘でなく、戦争の目的を以て特に選ばれたる少數の國民より成る軍隊の決闘であつた。即ち軍隊の勝敗に依つて國家の勝敗が決められるのが常であつた。軍隊にして戦争に敗れば、國民は潔く敗戦を自認したのである。恰かも川中島の合戦に、武田上杉の兩軍より勇士を選出して角力せしめ、其の勝敗に依つて全軍の勝敗を決したのと同じ形である。

歐洲戦争以前に於ける日清戦争も、米西戦争も、日露戦争も、何れも軍隊の戦争であつた。軍需工業、軍隊輸送等に從事せる少數特殊の國民が間接に戦争に従事したる外、大多數の一般國民は唯出征軍の送迎に萬歳の旗を振り、出征軍の慰藉に慰問袋を贈つた位に過ぎなかつたのである。

故に此時代に於ては戦争に勝つ爲めには、言ひ換ゆれば國防の實を擧げる爲めには、軍備を擴充して、出來得る限り軍隊の力を強くすることが、その唯一の途であ

つたのである。即ち軍備の大小は其まゝ直に國防の強弱を表示するもので、軍備即ち國防、國防即軍備、國防と軍備とは異名同體であつたのである。各國が國力の限りを盡して軍備の擴張充實に力めたるは、時勢の然らしむるところであつたのである。左れば其時代に於ては國家の安危を双肩に擔ふと云ふ意味に於て、軍人が社會的に尊敬せられ、延いて政治上に勢力を有したるも亦自然の勢であつた。

然るに歐洲戦争は文明國の戦争に一新紀元を劃し、戦争に對する世人の觀念を一變せしめた。即ち今日の戦争は最早や軍隊に依つて行はるゝ代表者の決闘でなく、全國民自身直接の決闘となつたのである。之を以て軍隊は國防の總てとなく唯其の前衛に過ぎず、國防の本隊は國民全體に移つたのである。老幼婦女も以前の如く停車場に軍隊送迎の旗を振り、慰問袋に思はせ文を忍ばせ、ストープにあつて戦勝の號外を持つばかりでは濟まなくなつた。老人も、婦人も、或は戰場に傷者を看護し、或は工場に軍需品を製作し、或は街道に電車を動かし、其他官衛に、會社に、

農園に、出征者に代つて夫れく身に應じ力に適する職を執らねばならなくなつた  
對戰中、英佛獨等の交戰國に於て婦人の新に職に就きたるものは何れも百萬乃至二  
百萬に達し、中には男子も避くる重労働に就いた婦人すらもある。

斯くの如く國民の總てが戰爭に参加するのみならず、兵器の進歩發達に依つて、  
戰場を遠く離れて砲聲すらも聞へぬ地方に在りながら、或は寺院の祭壇に祈禱せる  
善女が遠距離砲の砲彈に斃れ、或は公園に孫の守せる老婆が空中彈に碎かれるなど  
全國悉く戰場となつた。

其他一般封鎖に依つて國民の日常食糧すらも缺乏を告げ、幼兒のミルクに砂糖  
がなく、老人のパンにバターを缺き、國民的飢饉に苦しむ等、戰鬥員非戰鬥員の差別  
すらも無くなつた。國民最後の血の一滴迄も、國民最後の金の一錢迄もと云ふのが  
今日茲に今後の戰爭の常態であつて、眞に國民皆兵の具體化事實化である。過去の  
戰爭は軍隊或は軍備の戰爭であつて、現代の戰爭は國民或は國力の戰爭である。

歐洲戰爭は大正三年八月に始まり、大正七年十一月に休戦となり、實際の戰闘期  
間は滿四年と三ヶ月に亘つた、開戦の當初に於て戰期が斯く延長すべしとは何人も  
豫想せざるところで、殊に戰爭に對する歐洲人の心理を誤解し、歐洲の事情に暗か  
りし我國民の如きは、英國元帥キツチエナーの戰爭三年説を以て出鱈目の駄蝶と一  
笑に附した位であつた。尤も日清戰爭の實際戰闘期間が約八ヶ月、日露戰爭の實際  
戰爭期間が約一年四ヶ月、それでも相當倦怠を來した日本國民の頭を以て考へれば  
無理もない。

歐洲人自身と雖ども亦比戰爭があれ程長期に亘り、あれ程大規模に發展しやうと  
は恐らく誰も想像しなかつたであらう。唯時代の力に引摺られて騎虎の勢下るに  
下りられず、遂に破壊と困憊とのドン底にまで追ひ詰められたのであらう。時代の  
力とは即ち現代文明の力である、電信電話鐵道船舶自動車等の通信運輸機關の發達  
は、國の内外に於ける人員物資の集散分配を敏速容易ならしめ、各種工場の進歩は

兵器彈藥其他軍需の製造供給を豊富ならしめ、經濟力の膨脹は物資の購買力を大ならしめ、科學の進歩は潜水船飛行器タンクなど種々の新兵器を案出せしめ、印刷事業の發達は新聞其他各種の印刷物に依つて國民の戰意と敵愾心とを昂奮せしむる等諸物諸事悉く戰爭をして大規模ならしめざるものはなかつた。

右の如く現代の戰爭は國民戰或は國力戰である。即ち國家の全戰闘力を擧つて戦ふのである。而して軍備は唯其の前衛たるに過ぎない。前衛の任務は、攻勢的には敵の前衛を疾攻し、敵本隊の戦備未だ整はざるに乗じて之に痛撃を加ふるにある。防禦的には、敵の前衛を防ぎて我本隊をして戦備を整へしむるにある。何れにしても敵の前衛と對抗し得るだけの力がなければならぬ。その力の標準を決定する爲めに、所謂想定敵國なるものを設け、其國の前衛即ち軍備に照らして我軍備の量を定めるのである。

從來の軍隊戰或は軍備戰に在つては、今の前衛たる軍備が即ち本隊であつた。故

に軍備をさへ強大ならしむれば戰爭には勝つたのである。従つて國家は産業教育の如き文化施設を第二とし、軍備第一主義を執つたことは、時代に適應せる國策であつたと言ひ得る。粥腹で駿馬を買ふことも時に取つては必要なこともある。然るに現代の國民戰或は國力戰に於ては戰爭の勝敗を決するものは、前衛たる軍備にあらすして本隊たる國力である。故に假令前衛戰に於て勝利を得るとも本隊が敗るれば對局に於て敗戰である。之に反し前衛敗るゝも本隊が勝利を得れば、對局に於て勝戰である。歐洲戰爭に於て獨逸は前衛戰たる軍隊戰軍備戰に勝つて、本隊たる國民戰國力戰に敗れたのである。

凡そ或時期に於ける一國の戰闘力は一定量である。此の一定量の戰闘力より前衛たる軍備に多くの力を削げば、残りの本隊の力の弱くなるのは數理の當然である。之を以て現代の戰爭は單に軍備の大なるのみを以て勝つことは出来ない。軍備の後

に控ゆる国力が強くして然る後始めて國防の實を完ふし得るのである。  
そこで最も重要たる問題は、本隊と前衛との比率を如何にするかである。

## 第二章 現代軍備と政治

「政治とは何ぞや」と云ふ問題は「軍備とは何ぞや」と云ふ問題よりも、一層複雑でしかも一層茫漠たる問題である。その本質が推取であるか、支配であるか、又その様式が専制であるか、多数制であるかを問はず、政治の目的は窮極に於て國家の生活を律する爲めである。國家生活の維持安定、向上、伸展に必要なものは勿論國家生活を傷害破壊するものですらも、凡そ國家の有する總ての施設經營は、その善惡共に悉く政治に屬すべきものである。故に國家生活の維持に伸展を目的として經營せらるゝ軍備も亦自ら政治に屬すべきは言ふ迄もない。

然るに我國に於ては由來動もすれば、軍備を以て一般政治と區別し、軍備は軍人の專掌すること、政治家並に國民の干與關知すべきにあらずと云ふ様な懸想が行はれて居る傾がある。

我國の軍人は「世論に惑はず、政治に關はらず」と云ふ御勅諭に基づいて、道徳的に政治に關係することを戒められて居る。又法律的には平民軍人は衆議院議員より市町村議員に至る迄、總ての選舉被選舉の權を奪はれ、實際政治に干與することを禁せられて居る。併し華族の軍人は貴族院議員の選舉被選舉の兩權を有し、公侯爵の軍人は現役でも貴族院に議席を有して、鐵道のパスを使用するの特權を與へられて居る。同じ軍人でも貴族と平民とは之だけ待遇が違ふのである。尙ほ又陸海軍刑法第三百三條に於て、

軍人上官ノ許可ヲ得ズ政治ニ關シ上書建白其他請願ヲ爲シ又ハ演說若クハ文書ヲ以テ意見ヲ公ニシタルモノハ三年以下ノ禁錮ニ處ス

とあり、軍人は政治問題に關しては全く嵌口令をはめられて居る。かの純然たる政治家の陸海軍政務官ですらも、軍屬と云ふ譽をはめられて此刑法に縛られて居る。政治家が政治に關する意見が述べられぬなどは、政治家としての自殺である。その

辨、今の陸海軍大臣は現役の軍人でありながら、政治に干與するは勿論、所管以外の政治にまで干渉して、二重外交などを平氣でやつて居る。

軍人が政治に干與することの是非の問題は別とし、現に軍人が之を禁せられて居るからとて、國民並に政治家が之と交換的に軍事に干與すべからずと云ふ法規もなければ、又遠慮する必要もない。然るに何故か議會も、内閣も、軍備問題に關しては恰も腫物にさはるが如く、敬遠か、特待か、政界に於て治外法權でも有せるやの觀がある。軍備も大なる政治問題である以上、國家の他の諸施設と同様、政治的に取扱はるべきものであつて、軍事技術者たる軍人のみの專擅に委すべきものではない。

例へば新に鐵道を敷設するに當つては、先づ以て敷設すべき地方に於ける物資に産業等の經濟状態を調べ、都邑村落等の交通關係を調べ、山川沼澤等の地形を檢し、地勢地質の峻夷硬軟を測り、建設工事の難易便否や敷設に要する經費並に收支

豫算等を詳細に研究攻査し、夫に依つて内地線と爲すべきや、海岸線と爲すべきや、線路は單複何れとすべきや、停車場は何處に設置すべきや等、敷設に關する根本問題を決定し、然る後勾配を幾干にすべきや、橋梁を何式にすべきや、堅道を何處に穿つべきや等の技術的問題が決定せられるのである。

此の根本問題を決定するものは行政機關であつて、技術問題を決定するものは技術機關であらねばならぬ。若し然らずして最初より技術者が單に技術上の便否や工事上の難易のみに依つて鐵道の根本問題を決するが如きことあらば、斯かる鐵道は交通運輸機關としての完全なる能率を擧ぐることは恐らく不可能である。之と同時に行政機關が技術上の問題にまでも干渉することも亦決して善良なる鐵道を敷設し得る途ではない。

軍備とても全く之と同様である。一國の軍備を設定するには、先づ國家の地理的位置より、海陸の地形、各種の資源産業等の國家經濟狀態、各國との交友關係、時

代の趨勢、國際の狀況等を慎重に考察し、何れの國に對して備ふべきや、何れの種類の軍備に置きを置くべきや、幾干の軍備を整ふべきや等の軍備の基礎問題を政治的に決定し、然る後軍隊の編制、部隊の配備、艦船の大小種類等を兵術的に決定すべきものである。而して軍備の基礎問題を決定するものは、財政、經濟、産業、外交、軍事等各方面の知識より成れる政治機關にして、近年世間に唱へらるゝ所謂國防會議の類でなければならぬ。然るに此種の機關を有せざる我國にあつては、制度と慣例の然らしむる處として、軍備の基礎問題までも軍人のみに依つて勝手に計畫せられ、決定せられ、政府も議會も之に對して一言の客喙を許されぬ。唯之を實施するに臨み、豫算の上に於てのみ幾分緩急を加減し得るに過ぎないのである。元來軍人なるものは軍事専門の技術者である。其の修むるところは攻城野軍の兵術にあらざれば、作戰用兵の兵理である。國家内外の狀態を大觀し、經濟國民の政治的識見の如きは必ずしも其の優とするところではない。軍人より政治家に轉換し

たる田中前首相が其の生きた適例である。故に我國の軍備は恰も技師のみに依つて技術本位、工事本位に敷設せられたる鐵道と同様である。鐵道は單に汽車がレールの上を走りさへすれば宜いのではない。交通運輸を便にして國民生活に利するところがなければならぬ。軍備も亦徒に多くの軍艦を浮べ、多くの軍隊を養ふばかりが能ではない。平時は成るべく經濟的にして、而かも一朝有事の際には全能率を發揮し得る如きものではなければならぬ。之が爲めには軍備の設定は軍事技術者たる軍人のみの専斷に委することなく、財政、經濟、外交は勿論、國民の意思をも加へたる政治機關に依るべきものである。

抑々軍人の任務は戦争である。軍人の理想は戦争に勝つことである。故に軍人の思想が動もすれば好戰的に陥り易きは、その職任の然らしむるところで、極端に言へば、その好戰的なるところに軍人としての價值があるのである。乃ち軍人は好戰的なるが故に、總ての外國を以て敵國扱にする嫌がある。否な軍る敵國である

かの如く彼等の眼に映する。恰も藝術家が自然の事物を取つて悉く藝術の對照となすと同一の心理である。故に現代思潮たる國際協調の如きは軍人の思想と相容れぬものである。否な軍る了解の出來ぬものである。國際協調が完全に行はるゝ秋こそ軍人の失業する時である。

戦争には必ず相手を要する。故に彼等軍人は常に次から次へと當面の敵を捜し求めて居る。我國に就いて言へば、明治維新後に於ても、朝鮮より支那へ、支那より露西亞へ、露西亞より米國へ、將來米國と和解の出來た時には、新に新たなる敵が作られるであらう。苟くも軍備の存する限り假想敵國の無くなる時はない。

斯くの如く軍人が絶へず敵を捜し求むる心理は、戦争と云ふ任務に基因するものであつて、彼等の中には今尙ほ、敵國外患無ければ國危ふしと云ふが如き舊觀念に捉はれて、強ひて敵を作る者もあるであらうが、一般的には一は彼等自身の侵略的思想を以て他國を律するより生ずる對外憂慮と、一は戦争に勝つと云ふ彼等の理想



の實現を欲する好戰的心理に由るものであらうと信ずる。

軍人は自ら求めて敵を作りながら、常に自國の軍備を過小に、外國の軍備を過大に見積るることが世界軍人の共通癖である。先年日米の間に巡洋艦問題の喧しかりし時、日本の軍人も、米國の軍人も、双方共に自國勢力の劣弱を唱へ、その何れが眞であるのか、素人の局外者には判断のつかぬことがあつた。必ずしも惡意の誤魔化してなく、戰爭に敗けてはならぬといふ責任感に伴ふ憂慮よりして、外國の小坊主が大入道に見へるのであらうと思はれる。

從來軍人に依つて立案せられ、計畫せられたる軍備が常に過大にして、何れかの政治機關の關所に於て削減せられることは、殆んど世界各國に於ける共通事である。しかも此削減の爲めに國防に缺陷を生じ、國家を危胎に陥らしめたることを聞かない。結局國家として削減しただけ、財政經濟の上に利益した譯である。不完全ながらも國際聯盟成立し、武力侵略の帝國主義が國際間に影を瀋めたる現代に於ては

軍備の過小なるよりも過大なることが、却て國家としては危険である。軍備は小なるも自ら國際正義に背かぬ限り、猥りに他國の攻撃を蒙むる如き恐れはない。過大の軍備こそ外國をして不安の念を抱かしむる結果、自ら軍備の競争を誘起し、國際間の反感憎惡を招くのみならず、動もすれば軍備の強大を楯として國際正義を蹂躪し、遂に戰爭を誘發する危険すらもある。

名刀村正の血の誘惑は必ずしも講談師の出鱈目のみではあるまい。

### 第三章 軍備制度と我國の制度

軍人に依つて計畫せらるゝ軍備が常に過大の嫌あることは、列國殆んどその軌を一にして居る。とは云へ、之を以て直ち軍人の利己的野心と斷することは酷であらう。教育家が學校の増設を望み、宗教家が寺院の擴張を欲し、鐵道官吏が鐵道の延長を説くと同様、寧ろ其の職務に忠實なるが爲めとも考へられる。殊に軍人は戰爭に直面し、國家の興亡に關する勝敗の責に任ずる關係上、成るべく軍備の大なるらんことを欲するは人心の自然である。唯爰に考慮すべきは、我國の如く特種の制度を有する國に在つては、軍人の立てたる軍備の計畫を適當に調節すべき政治的機關の無きことである。軍國主義的制度を有したる獨露の帝政倒れたる今日、世界の多くの立憲國に於ては、軍備の計畫立案は軍人に依つて爲さるるも、之が決定權は政府、議會、若くは國防會議と稱する如き特種機關に存するのが常である。従つて

是等の關門に於て軍人の立案したる計畫を適當に調節加減することが出来るのである。

然るに我國の制度に依れば、參謀本部條例第二條の

參謀總長ハ陸軍大將若クハ陸軍中將ヲ以テ親補シ天皇ニ直隸シ帷幄ノ軍務ニ參畫

シ國防及用兵ニ關スル計畫ヲ掌リ云々

及海軍々令部條例第三條の

海軍々令部長ハ國防用兵ニ關スルコトヲ參畫シ親裁ノ後之ヲ海軍大臣ニ移ス

の規定に依り、陸軍に關する軍備は參謀總長、海軍に關する軍備は海軍々令部長に於て夫々計畫し、其の成案をば内閣其他何等の政治機關と協議するの要なく、直接天皇に奏上するのである。之が一時政界の問題となりたる所謂帷幄奏上權なるものである。元來帷幄なる文字は法律上如何に解釋すべきかを知らない。が、其の意味は大元帥司令部とでも謂ふべきものであらう。

是に於て軍事參議院條例第一條の

九〇

軍事參議院ハ帷幄ノ下ニ在リテ重要軍務ノ諮詢ニ應スル所トス  
の條文に依り、天皇は參謀總長及海軍々令部長より奏上したる軍備計畫をば、軍事參議院に下して諮詢せられる段取となる。

軍事參議院とは元帥、陸海軍大臣、參謀總長、海軍々令部長、及軍事參議官に親補せられたる陸海軍將官より成れるもので、何れも軍國主義的思想の強烈濃厚なる老軍人のこととして、參謀本部や軍令部の計畫を以て過小なりとこそすれ、過大なりとして削減するが如きことは先づ絶対に無いと見て差支へない。

斯くて參議院は諮詢案に對する審議の結果を復奏する。天皇之を可と認めらるれば憲法第十二條の

天皇ハ陸海軍ノ編制及常兵額ヲ定ム

の條章に依り、親裁の上之を參謀總長及海軍々令部長に下附せられる。日本の軍

備即ち常備兵額は爰に確定し、政府も、議會も、最早や之に對して一兵一艇をも變更することを許さないのである。日露戦争後、内閣總理大臣すらも公式には知らぬ間に、陸軍二十五個師團、海軍五十萬噸の軍備計畫が天皇の親裁を経て決定して居たなど、稱へられたのも、斯かる制度の存せるが爲めである。

右の手續に依りて決定せられたる軍備の計畫は參謀總長よりは陸軍大臣、海軍々令部長よりは海軍大臣を経て、内閣に移牒せられ、軍事參議官として諮詢に應じたる陸海軍大臣以外の大臣は、内閣總理大臣以下茲に初めて我國の軍備計畫を知り得るのである。素より實際に於ては然かく窮屈で他人行儀のものでなく、財政其他關係各部とは豫め充分の交渉内議が行はれるであらうが、制度の上の手續は正に右の通りで、軍備の計畫に關する限り國務大臣なるものも、軍人の命令を實行する屬僚に過ぎない觀がある。

併しながら斯く決定せられたる軍備の計畫をば、政府も議會も直に之を實施せね

はならぬと云ふ規定はない。政府と議會とは國家財政上の見地よりして豫算の上に於て、之が實施の緩急を加減することが出来るのである。此場合に於ても政府議會共に一旦決定せられたる軍備の計畫が過大であるとか、不急であるとか、計畫その物に反對なるが故に經費の支出を拒むことは出来ないものである。唯財政上の理由に依つてのみ軍備費を加減し得るのである。素より議會が軍備に關する意見を表明したる場合、天皇は民意を容れらるゝに吝ではなく、先年議會が陸軍縮少の意見を表明したる時、憲法第十二條に依る大權の發動により、四個師團に相當する常備兵額を減せられたこともある。

そこで軍備計畫を實施するに當り、政府若くは議會が軍部大臣の要求する如き經費の支出を拒みたる場合、軍部大臣として執るべき途は、政府或は議會の言ふ處に聽從するか、又は國防の責に任ずること能はざるを理由として辭職するかとの二つである。若し辭職したる場合に於ては、我國の官制として陸海軍大臣は夫々陸海軍大

將（法規上には豫備役を含む）に限ると規定せられてあるが故、後任大臣は必ず軍人中より選ばねばならぬのである。軍人も大中将どころになると、殆んど例外なく軍備尊重主義者である。彼等が此官制を楯に取りて軍部大臣不就任同盟を爲す時は如何なる強内閣も倒潰せざるを得ないのである。如何なる大政黨も政府を組織することを得ないのである。労働者の合法的ストライキをさへ國家に對する反逆の如く惡む日本の將軍連が、まさかストライキに依つて政府を毒殺し、國政の運用を妨ぐるが如き非愛國行動を執ることは萬々あるまいけれども、既に制度の存する以上實現の必無を期し得ない。從來とても其の氣勢を暗示して政府や政黨を威嚇したことは絶無ではない様である。

斯かる制度を有する我國に在つては、如何なる政府も政權を維持する爲めには、軍人の御機嫌を伺はねばならない。如何なる政黨も政權を握る爲めには、軍人の鼻息を窺はねばならない。在野當時軍備擴張に反對したる人も一たび内閣を組織すれ

ば、勿ち之が賛成者と豹變せざるを得ないのも之が爲めである。故に極端に評すれば、政府の死命も、政黨の運命も、軍人に依つて制せられて居るとも言ひ得るのである。

之が爲め政府若くは議會は財政上或は政見上よりして過當過大の軍備と認めながらも、軍部の強要に應ぜざるを得ないこともあり得るのである。毎年豫算編成の際大藏省と軍部省との交渉経過中、動もすれば軍部大臣桂冠の風評が傳へられるに徴しても、此間の消息を窺ひ知ることが出来る。

斯かる制度の存することは、内に在つては過大の國費を無益に消盡して國民の負擔を重からしめ、外に對しては外國の誤解を招きて國際の不安を來すのみならず、我憲政の運用を阻害すること大である。かゝる非立憲なる制度の革まらざる限り、我國の政治は安んじて憲政の常道を歩むことは出来ない。是れ前年來軍部大臣文官任用論の喧しき所以である。

之を以て本講座松下芳男氏の「軍政改革論」の繩張を侵略して、甚だ不都合であるが、筆の序に御免を蒙り、一二の私見を述べたい。

一、參謀本部條例及海軍々令部條例中「國防」の二字を削り、其跡へ「作戰」の二字を如ふ。

二、陸軍省及海軍省官制表中、大臣の欄にある括弧内の「大中將」の三字を削る。

三、左記人員を以て國防審議會を組成し、國防に關する計畫を審議せしめ、決議機關とする。國防計畫に關する軍事參議院の諮詢を廢止す。

議長、内閣總理大臣。議員、大藏大臣、外務大臣、陸軍大臣、海軍大臣、參謀總長、海軍々令部長、衆議院議員一名、貴族院議員一名、樞密顧問官一名、民間實業家一名、大學總長一名。

衆議院議員一名は成るべく在野黨首領とす。

#### 第四章 現代軍備と經濟

現在兵營又は軍艦等に在つて専門的に戦争の稽古をして居る人間即ち軍人は、陸海、空軍を合し、實數不明の支那の百萬を除くも、露佛の各約六十萬、日本の約三十萬人を初めとし、全世界を通じて概略四百萬人に達するであらう。而して其の志願制度たると、徴兵制度たるとを問はず、何れも元氣旺盛、體力充實、健康優秀の青壯年者ばかりである。

彼等は晴雨を問はず、寒暑を擇ばず、嚴格なる軍律の下に毎日血の出る如き烈しき軍事訓練に従事して居る。その力を合せば山をも抜くべく、其の汗を流せば舟をも浮べるに足るであらう。而かも人間の尊きはほどの勞働力を以てして、一粒の麥も生せば、一尺の糸も産しない。人類社會に是ほど不生産な勞力があるであらうか。

現在世界の軍艦は大小を合して英米の各約九十萬噸、日本の約六十萬噸を始めとし、各國の軍艦を合すれば、其全排水量は四百萬噸を算するであらう。一噸の建造費大小つき混せ、今日の時價に於て平均二千圓と見積れば總額八十億圓である。是ほどの大資本を投じたる船腹を浮べ、而かも演習訓練の爲め年々巨億の燃料需品を消費しながら、一噸の貨物を輸送するでもなく、一尾の魚を漁獲するでもない。經濟界に此位不經濟な資本の居眠があるであらうか。

華府會議の海軍制限協定、國際聯盟の軍備縮少運動を以てして、しかも世界の各國と稱するものは、今尙ほ國費の一割五分乃至三割を軍備費に充當して居る。歐洲戦争前、軍備競争の激烈なりし時代に在つては四割以上を支出した國もあつた。我國の如きも先年來、力めて海陸の軍備を縮少制限したるにも拘はらず、尙ほ毎年四億圓以上の軍備費を計上して居る。現在世界各國の軍備費は英國の一億二千萬磅、米國の六億五千萬弗、佛國の五十萬フラン、伊太利の三十億リラ、露國の四億ルー

ブル、獨逸の四億五千萬マール、日本の四億五千萬圓等を主なるものとし、世界の合計は日本貨幣に於て七八十億圓にも達するであらう。

歐洲戦争の如き超数字的の破壊事業は別とし、現代に於ける世界最大の事業とも云ふべきものは巴奈馬運河の開掘であらう。而かも之に要したる経費は十五億圓に達しない。尤も當時と現在とは幾分貨幣價値の相違はあるけれども、現代世界の軍備費に比すれば甚だ少である。今の世界が年々軍備に投じつゝある経費と努力とを以てせば、如何なる大規模の事業も行はれるであらう。歐羅巴に就いて言へば、アドリヤ海と北海とを貫ぬく運河も數年の間には成功するであらう。英佛海峡の如きは規模の小に於て恐らく問題に上るまい。

之を戦國に就いて言へば、年々四億餘圓の軍備費を教育事業に投ずれば、各府縣に月謝不要の大學及高等學校を設置するも、尙ほ使ひ切れない。之を國民負擔の輕減に用ゐれば、總ての租税を半減するも尙ほ餘りがある。之を鐵道に用ゐれば、人

も貨物も悉く無賃で輸送することが出来るであらう。主力艦一隻の建造を節約すれば、一年間全國の地租が全免せられ、師團一個を減すれば、大學の二つも三つも作れるであらう。更に又、陸海軍人約三十萬人が生産事業に従事するとして、其の賃金日給平均一圓五十錢とすれば、その一ヶ年總額は一億二千萬圓に達する。之を軍備費に加ふれば、軍備の爲めに我國一ヶ年の經濟上の損失は六億圓に近い。

現代國家が軍備の爲めに蒙むる經濟上の損失は斯くの如く多大である。併しながら夫れが不經濟なる浪費、無益なる徒費であるや否やは、軍備なるものが國家の生存生活上、必要なるものであるや否やに依つて決する。若し軍備が國家の生存生活に缺くべからざる必要なる施設であるならば、假令直接の生産は無くとも無益の浪費とは言へない。

軍備の目的や性質やに就いては前既に述べた。軍備と無産者との關係に就いても亦既に説くところがあつた。我國が年額六億圓の經濟損失に依つて利するものは誰

ぞ、苦しむものは誰ぞ。利する者は軍備の存続を希望するかも知れぬが、苦しむ者は之が縮少撤廢に努力せねばならぬ筈である。

現代軍備と經濟關係に就きて興味ある問題は、近年に於ける支那の對外行動、否な支那に對する列國の態度である。現代の支那には軍艦らしき軍艦は一隻もない。軍閥の私兵以外に國家の軍隊とも稱すべきものは殆んど皆無である。その軍閥の私兵とても、武装の不完全なる點に於て、訓練の不充分なる點に於て、到底列國の正規軍隊の敵ではない。實質に於て支那の對外軍備なるものはゼロである。然るに近年に於ける支那國民政府の對外活躍は、之を弱者の奮起と見れば誠に痛快を感ずる。支那の主張が現代の民族心理に於て合理的であるとは云へ、又支那が巧みに列國の對支不一致の虚に乗じたりとは云へ、列國を向ふに廻はして豫ての主張の貫徹に猛進したる處、殆んど傍若無人の觀があつた。殊に一時當面の敵として狙はれたる英國の如きは、偉大なる海陸の兵力を擁しながら、支那の命する處是れ從ふの有

様で、租借地の暴力回收に對してすら泣き寝入の態度に出た。日本の如きも一時えらい意氣込みで山東出兵を斷行したもの、支那の總排日食つて濟南に立往生するに至つた。

列國は何の恐るゝところがあつて、無軍備同様の支那に對し、斯くも遠慮氣兼をするのであらう。之が理由としては支那の主張が合理であるといふことも其の一であるが、最も重き點は支那の經濟力である。更に具體的に言へば支那國民の購買力である。支那の國土の富が何うであらうと、支那國民の懐工合が何うであらうと塵も積れば山となるで、支那四億民衆の購買力は世界の經濟界に於ける一大勢力である。支那は現に日英米獨その他の諸工業國に取りては大華客である。殊に現代文明の華漸く統ばんとせる支那の將來は、列國貨物の大競争市場である。領土擴張の武斷的帝國主義は既に行詰りて、世界は今や市場獲得の經濟的或は資本主義的帝國主義に進みつゝある。此時に當り世界に取り残されたる唯一の大市場



たる支那の市場を獲得すると否とは、自國産業の消長に影響することが大である。されば支那國民の感情を害して絶好の市場を失ふことを恐るゝ列國は、相協力して支那の増長を抑壓せざるのみならず、寧ろ抜け掛けの功名的に支那の歡心(くわんしん)を求むるに力めた。期(か)かる事情(じじやう)の下に、今日(こんにち)何れの國も支那に對して敢て武力(ぶりよく)を加ふるものはないであらう。支那の此の潜在的經濟力(ぜんざいてきけいりき)こそは百萬の軍隊にも優る國防力である。唯併(たせしか)し最近支那が露國に對して取りたる東支鐵道のクレーターのみは、聊(いさ)か相手(あひて)を察せず調子(てうし)に乗り過ぎたる觀がある。露國の反噬(はんぜい)に會つて縮み上つたなどは、あまり譽められた話ではない。是れ一は平和主義(へいわしゆぎ)を奉(ほう)せる露國の隱忍(いんじん)を以て、弱(よわ)き爲めの無抵抗主義(むていかうしゆぎ)と誤信(ごしん)したるが爲めである。一は露國を以て他の資本主義國(しほんしゆぎこく)と同一視(どういつし)し、支那の市場(しちやう)に垂涎(すゑん)するものと誤信(ごしん)したるが爲めである。今日の露國は支那に對して、經濟的に多く求むるところはない。従つて己(おのれ)を屈してまでも支那國民の歡心(くわんしん)を買ふ必要もない。支那再三(さんさん)の不法に激し、猛然(まげん)として起ちたるは毫も不思議でない。

支那の國權回復運動(こくけんくわいふくうんどう)が何處まで成功するやは今日尙ほ不明である。併し支那が今回露國に對して爲したる如き不法(ふぽう)を列國に對して行はざる限り、支那は一兵一艦(いっぺいいつてい)なくとも國際的に安全(あんぜん)であらう。平時二十個師團(ごしだん)の軍隊を養ひ、六十萬噸の軍艦を浮べ、三強五大(さんきやうごだい)の一國として威張(いば)りながらも、尙ほ不斷に戰々(せんせん)競々(きやうきやう)として國防の薄きを聞かされる日本國民は幸か、不幸か。

獨逸はベルサイユ條約(てうやく)に依りて、その陸軍(りくぐん)長期服役(ちやうきふくえき)の十萬人に制限(せいげん)せられ、その海軍(かいぐん)も亦現代海戰(またげんだいかいせん)に適する如き軍艦(ぐんかん)は一隻(せき)も持つことを許されて居ない。之に反し佛國(ふつこく)は海陸共(かいりくとも)に獨逸に數倍(すうばい)せる軍備(ぐんび)を有して居る。而かも尙ほ獨逸の復讐戰(ふくしやうせん)を恐るゝこと他所(よそ)の見る目(め)も氣(き)の毒(どく)な程である。大軍備(だいくんび)を有する意義(いぎ)が何處(どこ)に在るやを疑(うた)げしめる。斯(か)くの如く獨逸(どいつ)は歐洲(おしやう)の二等國(にとうこく)以下に軍備(ぐんび)を制限(せいげん)せられながら、尙ほ大國民(だいくみん)として、優秀民族(いしゆしゆんぞく)として、英佛人(えいふつじん)同様に世界(せかい)に重(おも)きを爲して居る。日本國民

は、彼が英米人なるが故に尊敬し、獨逸人なるが故に輕蔑するであらうか。軍備の大小が必ずしも國家國民の地位と價値とを上下するものではない。武力を積極的に使用して侵略掠奪を恣にしたる時代に在つては、その事は非善惡は別とし、國家が軍備を存續する意義が明らかであつた。然るに現代の軍備なるものは、何等明確なる意義の存するにあらず、唯漠然たる國際的猜疑や、漫然たる國民間の誤解等より來る憂慮と不安とに脅やかされて、萬一の場合に備ふる爲めと謂ふに過ぎない。

進んで侵略を逞しうする程の蠻氣もなく、退いて撤廢を斷行する程の覺りも開けず、四百萬人の軍隊と四百萬噸の軍艦とを半上半下の間に彷徨せしめ、之が爲め人間の尊き汗と膏とより成れる百億に近き巨費をば、年々歳々無意義に空費しつゝある。之が平和と戦争とに半覺半眠の現代人が軍備に對する態度である。城の如き巨艦が隊列堂々波を蹴つて進む勇姿の影、壯丁千騎馬上に長刀を揮ふ壯景の後には、

食ふに食なく、住むに家なき幾百千萬の無産者が、飢に泣き、寒に泣きつゝあるのである。戦争の爲めにはタンクを發明し、毒瓦斯を工夫する現代人間の頭を以て、平和の爲めに此の軍備を何とか出來ぬものであらうか。

之を何とか爲し得るものは、戦争を否認する世界無産者の團結の力である。

## 第五章 現代戦争と經濟

兵糧は到る處で百姓より徴發し、鎗一筋で突き合ふた昔でさへ、戦争には多額の軍用金を要した。されば徳川幕府の大名抑壓策は、彼等に重き土木賦役を課し、謀反の軍用金を貯へさせぬことにあつたと云はれて居る。好戦大王那翁も、戦争に必要なるものは一にも金、二にも金、三にも金と云つたこと程、戦争には莫大な金が要る。現代の勞働争議だつて軍資金なくては戦へない。

大和魂宗の日本人中には、十露盤弾ひて戦争は出来ないと云ふ者がある。儲に半面の眞理である。併し半面には又十露盤弾かすして戦争は出来るものではない。科學が進歩し、工業が発達し、多種多様の武器兵器が發明せられ、莫大なる彈藥その他各種の軍需品を要する現代戦争に於ては殊に然りである。

歐洲戦争に於て交戦國の消費したる直接戦費のみにても三千億圓と稱せられて居

る。三千億圓と言へば日本帝國を三つ半ばかり、川の底の砂利まで計つて賣つたほどの金である。猫額大の膠洲灣と、敵の居らぬ西比利亞や樺太への出兵のみでも、日本は十億圓足らずの軍費を使つて居る。十億圓と言へば日本一の富豪三井一家の全財産である。

歐洲戦争の結果、獨逸、埃太利、露西亞は財政的に一旦破産し、佛蘭西、伊太利、白耳義などは今尚ほ借金に苦しみ、貨幣の價値は一時十分の一位に迄も下落した。而して戦争の爲めに残るものは何ぞ？ 勝つたものも、敗けたものも、多額の借金と、一千万の人間の墓と、數千萬の不具者と、無数の寡婦や孤兒ばかりである。成程十露盤弾ひては、斯んな馬鹿氣な戦争は出来ぬであらう。

現代の戦争は機械の競争である。軍艦と大砲と飛行機とタンクとの數の競争である。ヨリ澤山の太砲から、ヨリ澤山の破壊彈や、殺人彈や、燃燒彈や、毒瓦斯彈やを發射した方が勝つのである。日本兵得意の劍付鐵砲の突撃などは、最早や舊時代

の舊戦法となつた。而して是等の兵器彈藥その他の軍需品は、各國ともに平時より相當の準備はあるも、武器の進歩や、國家の經濟や、貯藏格納の關係や、外國に對する手前など種々の事情に依り、さう無限無數に準備し置かるべきものではなく、その大部分は戦時に臨んで製造調達せねばならぬのである。此の戦時に於ける兵器彈藥軍需等の製造作業を假りに戦時工業とでも名付けて置く。

總ての工業の要素は人力と機械と原料とである。現代戦争が多くの人力を要することは既に述べた通りである。過般の大戦に於て交戦國の殆んど總ては、平時は業者の多きに苦しめるに拘はらず、戦期の長びくに従ひ、人力就中工場労働者の缺乏に苦しみ、マンパワー不足の悲鳴は到る處に聞かれ、佛國の如きは遂に支那労働者の輸入をさへ爲すに至つた。戦争中人力の缺乏を告げなかつたのは、恐らく露國ぐらゐのものであつたらう。之とても人力に餘りがあつたのでなく、機械力が足らなかつたと言ふ方が或は適切かも知れぬ。

次には機械である。現代工業の發達は全く機械の力に由るもので、工業の盛衰を代表するものは機械の多少である。小は拳銃彈より大は大戰艦に至る迄、今日の兵器は悉く機械の力に待たねばならぬのである。左れば愈戦争となれば何れの國に於ても所謂工業總動員に依つて、國內に存する大小總ての機械工業を擧つて戦時工業に轉ずる。

歐洲戦争は英佛伊白獨塊等世界の主要工業國の殆んど全部が之に参加し、後には米國も亦之に加はり、何れも國內の全工業力を擧げて戦時工業に従事したのである。「メード・イン・ジャパン」の糊付けの靴やシャツが世界の市場を横行して、阿弗利加の内地にまでも粗製濫造の名聲を博したのは、歐洲交戦國に於ける生産工業の停止したる御蔭であつた。一年八ヶ月に互りたる日露戦争の全期を通じて、我軍より發射したる總砲彈數をば、ソナムの戦に於て佛軍は一日に發射し盡したと云ふことである。此一事を以て推すに現代文明國間の戦争に、如何に多くの機械力を要

するかに想像せられる。

斯くの如く歐洲工業國の殆んど全工業力を動員して戦時工業に従事してする。而かも尙ほ各種の兵器軍需品に不足を告げ、中立國並に友國等よりの供給を仰いだのである。日本に於ても佛國の驅逐艦を建造したり、露國に軍需品を供給したりした。左れば機械力に於て著しく劣れる國は、外國より充分なる補給を受け得ざる限り、國民如何に勇なるも、軍隊如何に多きも、戦争を爲すの能力なきものである。

第三には原料である。之が供給充分ならざれば、人力の優秀も、機械の精良も、その能率を擧げ得ざるは云ふ迄もない。工業の三要素たる人力、機械、原料は恰も三輪車の如く、又鼎の足の如く、互に相倚り相扶くるもので、その何れを一とし、何れを二とすることは出来ない、併しながら人力と機械とは或程度までは、人爲的に之を充實整備することを得るも、獨り原料に至りては其の大部分は國土の天産物

なるが爲め、文明如何に高きも人力を以て如何ともすることが出来ない。その足らざるものは外國よりの供給を仰ぐ外はないのである。而かも日本の如き四面環海の國は、動もすれば敵の爲めに經濟封鎖を受け、海外よりの供給を遮断せられることがある。國內の原料の産出乏しく、海外よりの供給杜絶すれば、國民の戦意如何に強盛なるも、最早や戦はずして敵に屈するの外はないであらう。獨逸の屈伏たるや海陸の武力戦に敗れたるにあらずして、聯合國の經濟封鎖に由る軍需原料並に國民食料の缺乏に因るものである。

斯くの如く戦争が機械化し、工業化し、經濟力化したる現代に於ては、軍需原料の大部分を外國に仰ぐが如き他力本願の國防は、恰も外國の傭兵に依つて國を守ると同様、戦争國家としては致命的弱點を有せるものである。極端に評すれば斯くの如き國は獨力戦争を爲すの資格を缺けるもので、平時に如何に盛んに海陸の軍備を張るとも、畢竟是れ砂上の樓閣に過ぎないのである。幸に敵の封鎖も受けず、自由

に外國の原料を取り入れ得るとするも、之を購入するには多額の金力を必要とする。國內に於ては人間も、機械も、原料も、勝手に徴發も出來、又は紙屑同様の紙幣を以て買ひ上げることも出來るが、外國の物資は、國家の經濟信用の衰へたる戦時に於ては、現金でなければ取引が出來ない、而かも其の價格は所謂戦相場場で、平時に比して著しく高價である。

金錢に親子なしと言ふが、同盟國でも、聯合國でも、勘定は勘定で、買った物には金を拂はねばならず、借りた金は返へさねばならない。大戰當時、聯合國は軍需並食料品代として米國より百五十六億圓、又佛、伊、白は英國より百餘億圓の借金をして居る。此戦債問題で歐米の間は今尚ほゴタ／＼して居る。日本とても聯合國と協同戦線に立ちながら、國內の總藏拂をして殘品を聯合國に高く賣り付け、大分金儲をしたのである。

若し夫れ國內に原料乏しく、外國より之を購入する財力も無しとすれば、斯くの

如き國は現代戦争を語る資格のないものである。之を要するに現代の戦争は軍備即ち武力の戦争でなく、國力即ち經濟力の戦争である。故に戦争開始の鍵を握れる者は、兵力を指揮する軍人にあらずして、經濟力を支配する經濟關係者でなければならぬ、經濟關係者とは獨り銀行家や實業家のみでない。勞働者も亦大なる經濟關係者である。今後の戦争は勞働者の同意なくして行ふことは恐らく出來ないであらう。否な勞働者は戦争開否のキイを握れるもので、其の實例は既に英國に於て示された。露國に於ける勞農革命の當初、露國に對する英國の武力干涉が、英國勞働組合の反對に依つて實行不可能となつたことがある。今日の世界は資本家の意思に反ひて何事も出來ぬ如く、明日の世界は勞働者の意思に背いて何事も做し得なくなるであらう。

兵力を振りかざして領土の大小を争ひたる時代は過ぎ去つた。異民族を征服し或は支配することの不合理と困難とは、英國が會て和蘭に於て教へられ、日本が今

朝鮮に於て教へられつゝある。現代に於ける國家の發展とは、外國の市場を經濟的に征服することである。自國生産品の御得意先を外國に開くことである。經濟上の得意國と戰爭することが、自國の經濟的破滅であることは、ノルマン、エンゼルの會て唱道せるところにして、歐洲戰爭が實地に經驗したる學問である。

今でも地方に旅行すると、青年團や在郷軍人會の思想善導講演會などで、勳章を下げたカーキ服が日米戰爭を叫んで、善良なる田舎人を威かして居る。米國は日本の最大得意國である。米國人が生糸を買つて呉れなかつたら、日本の經濟界は何うなる。日本の最大工業は紡績である。米國が紡績原料たる棉花を賣つて呉れなかつたら、日本の經濟界は何うなる。同時に日本も亦米國の爲めには好得意國である。米國の輸出貿易年額約九十億圓の中、日本への輸出は約六億で、英、加、獨、佛に次ぐ第五番目の得意先である。斯くの如き密接重大なる經濟關係を有する日米兩國の間に於て、如何に愛國狂者が戰爭を叫んだとて、經濟關係者は決して財布の紐を

解いて戰費の支出を諾するものではあるまい。

故に經濟關係より見たる時、日米兩國が互に想定敵國として軍備を競ふことは全く無意義の散財で、國民が之に氣付かぬのは、軍人の宣傳に乗せられて居るのである。日本の立場より見て、日米戰爭は斷じて出来るものではない、假りに萬一戰爭が起りたりとするも、我國の弱點は主力艦の比率や巡洋艦の多少にあらずして、前記の産業、物資、財力等を考慮したる經濟力である。

茲に於て結論に到達する。國際暴力の否認せられたる現代に於て、經濟力薄弱なる國家が世界に處する根本國策は、勝利の見込乏しき戰軍を目的として軍備を張るよりも、戰爭の危際なき平和を理想として軍備の縮少撤廢に向つて努力すべきである。而して之が爲めには國民教育を根本精神から革めねばならぬ。併しそれは今の資本主義國家に於ては、言ふべくして到底行はれ難き註文であらう。

## 第六章 現代軍備と外交

兵力の背景なき外交は喜劇に過ぎずとは、獨逸宰相ビスマークの言として傳へられて居る。彼は此語を施政の信条とし、標語とし、脅喝外交と鐵血政略とを以て、外に對しては帝國主義、内に於ては軍國主義を實行した。獨り獨逸のみならず、現在歐洲諸國が世界の各處に領有せる殖民地及租借地の殆んど總ては、武力によつて未開民族より強奪したるか、或は脅喝外交に依つて弱國より強借したるものである。第十八世紀の末頃より第十九世紀にかけ、蒸汽、電氣、其他各種の科學上の發明及發見に伴ふ機械工業の急速なる發達は、歐洲諸國をして工業原料獲得の爲め、殖民地の占領爭奪に狂奔せしめたのである。

當時國際公法未だ行はれず、國際道德未だ發達せず、軍國主義、帝國主義旺盛にして、優勝劣敗、弱肉強食が國際間の通義常道とせられ、權謀術數のマキャベリ

ズムが外交の本領とせられたる時代とて、文化の低き小弱國は、見る／＼中に強大國の爪牙に懸り、阿弗利加は忽にして分割し盡され、亞細亞に於ては古き歴史の印度を初め、南洋諸島、縮甸、安南、阿富汗斯坦、卑路斯坦等は相踵いで、其の獨立を失ふに至つた。而して是等の諸國の滅亡は、戰爭の結果と云ふよりも、寧ろ脅喝外交の力に依るものが多いのである。故に此時代に在つては、軍備が外交の背景と云ふよりも、寧ろ外交が軍備の前哨であつたのである。

近年に於て脅喝外交を最も頻繁に味つたのが支那である。支那は鴉片戰爭、清佛戰爭、日清戰爭等に悉く敗れて、眠れる豚の現實を曝露して以來、列國のナイフは支那に集まり、思ひ／＼に其の肉を削り始めた。獨逸は不良宣教師二名殺害の報償として膠州灣を切り取り、露國は義和團事件のドサクサに乗じて遼東半島を奪ひ英國は威海衛を、佛國は廣洲灣を租借し、伊太利は三都埃を狸ひ、日本も御多分に洩れず遅掛けながら二十一箇條で少しばかり脅かして居る。國際裁判に掛けたら、



何れも皆脅喝罪に問はれることを免れない。此時代に在つてはビスマークの言は善悪に拘はらず、儘に眞理であつた。

併しながら過去一世紀間、就中最近五十年間に於ける人文の進歩は誠に著しく、鐵船が水上に浮ぶを奇蹟として世界の造船界を驚かしたるは、僅に八十年前なるを思へば、時世の推移、世態の變遷の大なるに驚かざるを得ない。此間に於て國際交通は繁劇となりて人種的増悪を緩和し、國際貿易は發展して自他相通の利を覺り、世界は漸次弱肉強食の動物社會より共存共榮の人間社會に歩一歩進みつゝある。殊に歐洲大戰は各國民をして戦争の慘禍を滿喫せしめ、正義尊重、暴力排斥の觀念を増進せしむるに至つた。かくて國際關係はマイト・イズ・ライト（力は正義なり）の暴力主義より、ライト・イズ・マイト（正義は力なり）の正義主義に轉進しつゝある。

加之、世界の經濟界は工業原料獲得の爲めの殖民地爭奪時代は既に過ぎて、今や

生産品賣捌きの爲めの販路擴張時代となつた。土地を占領するには武力と脅喝とが有効であつたであらうが、商品を賣込む爲めには威壓や脅喝は禁物である。即ち脅喝外交よりも御機嫌取外交を必要とするに至つた。前述べた如く現在の支那に對する列國の態度が即ち夫れである。

歐洲大戰の遺したる最も意義ある産物はタンクにあらず、毒瓦斯にあらずして、實に國際聯盟である。素より今日の國際聯盟は其の理想に達せざること尙ほ甚だ遠く、積極的には何等期待するを得ずとは云へ、消極的には少くも小弱國の正當の權利は擁護せられ、脅喝外交を用ゐることを許されなくなつた。加之、戦後に於ける平和主義、民主主義の勃興は、從來常に國際葛藤を助長したる嫌ある秘密外交を廢して、公開外交、國民外交を唱へしむるに至り、陰險なるマキャベリズム外交は最早や之を行ふの餘地なく、總ての國際交渉は世界の前に公表せられて、是非の判断を世界の輿論に聞かねばならなくなつた。かくて強大なる軍備も最早や之を外交

の背景として不正に他國を脅喝するに用ゐることは出来なくなつた。

外交の背景としての軍備の影を薄からしめたる他の因由は、各國民の政治的覺醒と思想の進歩とである。往時國民思想尙ほ卑低にして軍國主義、帝國主義を以て立國の正道と盲信したる時代に在つては、國民の對外思想は理非曲直を問はず、唯一の對外硬であつた。外交官が最後の通牒を送り、政府が自由行動をほのめかせば、國民は舉國一致の名の下に盲目的に政府の政策を謳歌支持するのが常であつた。然るに國民が政治的に目覺めたる現代に在つては、最早や無條件に對外硬を歓迎するものではなく、自國の主張と行動とが果して合理的なるや否やを究め、若し不合理なる場合には斷乎として兵力の行使に反對する様になつた。國民の政治思想尙ほ甚だ低き日本に於ては、對外硬即愛國と誤信せる連中多きも、國民の政治思想高き英國などに於ては、政府の出兵政策に對して國民は決して盲從するものではない。全國民の一致賛同を得ずして兵を動かすことは、何れの國と雖ども躊躇すると

ところで、従つて兵力のみを背景として強硬外交を行ふことが出来なくなつた。

斯くの如く、國際正義の發達と、秘密外交の廢止とは、外交を外交として武力より獨立せしむるに至り、外交は最早や武力の前哨でもなく、傀儡でもなく、國際の平和と親善とを圖るといふ、その本來の任務に到達したのである。從來屢軍人に依つて行はれたる武斷的陰謀的二重外交の如きは、對外的にも、對内的にも、最早や其跡を絶つてあらう。唯奈せん、時に頑限愚蒙の輩ありて滿洲重大事件の如きを惹き起し、公明なるべき外交を陰慘ならしむるを遺憾とする。

されば如何に強大なる軍備を有するも、我が主張にして國際正義に合せざる限りそれが外交の後援とはならぬのである。之に反し軍備は假令小なるも、我行動にして國際正義に反せざる限り、他國の脅喝に屈する必要はなくなつたのである。軍備が外交の後援たり背景たりし時代は、今年と共に遠かりつゝある。

軍備は最早や外交の後援でないと共に、寧ろ外交の破壊者である。國際道德の發

達と、國際經濟の緊密とに従ひ、如何に帝國主義思想の強き國民とても、今や他國に對して武力侵略や脅喝外交の不可能なるを悟らぬものはあるまい。併しながら民既分裂し、國家對立して以來幾千萬年の久しき間、人類の胸裡に植へ付けられたる異民族間の猜疑心と、異國民間の反抗心とは、到底一朝一夕に除き去ることは出来ない。而して此の民族間の猜疑心を唆り、國民間の反抗心を煽るものは、各國の軍備に如くものはない。何れの國民も自國の軍備は絶対に國防の爲めであると稱へながら、他國の軍備は侵略の爲めであると思つて居る。日本で軍艦が進水すれば日本人は國防の充實を悦びながら、米國が軍艦を建造すれば挑戰的と精神を惱まして居る。

主權者の慶弔交換も、外務大臣の夜會も、駐外大使の親善演説も、學者の交換教授も、觀光團の往來も、軍備擴張の電報一つに依つて粉ナ微塵に打ち壊されて仕舞ふ。同英同盟二十年の親情も、新嘉坡軍港の築造に依つて根底より破られ、日米

不斷の反目は、移民問題よりも寧ろ海軍の競争に歸困して居る。太平洋に漲る暗雲は日米の軍艦より吐き出す煤煙である。太平洋に逆巻く濁浪は日本軍艦の蹴上ぐる波である。太平洋より軍艦の姿の消へる時こそ、太平洋が眞に太平となる時であらう。軍備の對立と、國交の親善とは到底兩立の出来るものではない。而かもブルジョア階級の政治家も、外交家も、教育家も、資本家も、宗教家も、それが出来るかの如く言つて居る。又さう思つて居るらしい。彼等は水と火とを一つの器に入れ得ると信ずる眩惑者である。

現代の世界に於て軍備撤廢を即時斷行の勇氣と覺悟とを有する國——大國——は勞農露國ぐらゐのものであらう。畢竟彼には他國を搾取る欲と、市場獨占の野心が無いからである。共產主義の是非は別とし、勞農露國の徹底的なる平和主義は、今回の東支鐵道問題に對する露國の態度に依つて知ることが出来る。之が露國でなく日本であつたなら、何うであらう。

## 第七章 現代軍備と帝國主義

相當教育ありと思はるゝ或る思想善導家が「支那の國民革命には同情するが、反帝國主義の宣言が氣に食はない」と言ふ。その理由を尋ねると、反帝國主義は日本帝國の國體と相容れないからだと言へた。此賢明なる善導家は君主國と帝國主義とを混同して居るらしい。斯かる善導家に依つて導かれる日本國民の思想は定めし善良となることであらう。

その後また或會で、國家の選良とか言はれる一言居士の一代議士が「我々忠良なる七千萬の國民は國體の尊嚴を擁護して益帝國主義を發揚せねばなりません」とやられたのには、思はず「嗚呼！」と叫ばはるを得なかつた。

帝國主義（イムペリアルイズム）に對する解説は種々あるであらう。併しながら要するに帝國主義とは、その力の何たるを問はず、或る力を以て自國の利害の爲めに

他國を支配することである。故に帝國主義は國家我利主義である。往時の羅馬帝國がその好範例であつて、帝國主義の語も亦實に此處に淵源して居る。

帝國主義の目的とするところは他國を掠奪若くは搾取することである。故に此目的を達成するには必ず力を要する。即ち一は武力で一は資力である。その武力に依るものを侵略的帝國主義或は武斷主義的帝國主義、資力に依るものを經濟的帝國主義或は資本主義的帝國主義とも稱する。

侵略御免の時代に在つては帝國主義の實行は専ら武力で行はれた。従つて他國を侵略する爲めには、或は不時に他國の侵略を防ぐ爲めには、常に武力を存置することが必要であつた。是に於て常備兵力即ち軍備なるものゝ必要を生じたのである。今日の存在は昨日の必要で、今日厄介視せらるゝ軍備も、元を訊せば必要に促された産物であつたのである。

故に侵略時代に於ては、軍備は國家生存上必要缺くべからざるものであつた。而

して軍備の能率を最高度に發揮する爲め、軍事を以て國家政治の全部若くは第一位に置くもの即ち軍備第一主義或は軍備立國主義と稱するものである。軍國主義の理想は國家を以て一大兵營化するに在りて、武家萬能の封建政治の如きが制度としての其の好適例である。而して軍國主義は侵略的帝國主義を遂行する爲めの方便として用ゐらるゝのが常である。

往時の帝國主義は専ら掠奪であつた。被征服國民の財貨を劫掠し、住民を奴隷とし、甚だしきは財貨を奪ふて住民を悉く殺戮した場合すらもある。成吉思汗の遠征が多く夫れであつた。然るに近世に至り自由思想の發達と國際關係の複雑とは、狼りに他國を侵略し、他民族を支配することを困難ならしめたと同時に、一面に於ては工業の發達に伴ひ生産過多となり、販路を國外に求むるの必要を生じた。是に於て從來の「太く短く」の一次的掠奪よりも「細く長く」の連続的搾取を有利とするに至り、武力を以てする侵略的帝國主義は漸次影を潜めて、資本に依る搾取的帝國主義が之に代はるに至つた。

國主義が之に代はるに至つた。侵略的帝國主義は軍國主義に依つて遂行せられ、搾取的帝國主義は資本主義に依つて達成せられる。抑々資本主義なるものは搾取的利己主義と排他的個人主義との混血兒であつて、その窮極の目的は經濟の優越である。經濟の優越は資本の集積である。資本の集積には利潤の多獲が必要である。利潤の多獲には薄利多賣が最も有効である。薄利多賣を爲す爲めには他の競争を排して市場を獨占することが必要である。

市場を獨占するには前記に述べたる如く、自由競争に依つて他國品を驅逐するか或は權力に依つて他國の競争を壓排するかである、前者は相當なる努力と犠牲とを要するも、後者は自國並に自國の支配下に在る殖民地、保護國、租借地等に對しては國家權力を以て自由に之を行ふことが出来る。故に是等の地域に住せる人民は、經濟上の自由競争に依つて、良品を廉價に買ふ代りに、支配國の不良品を高價に買

よことを強制せられるのである。即ち國民的或は民族的搾取である。而して支配國は此の經濟上の不自然を強制する爲めに武力即ち軍備を必要とする。併し之に要する武力は軍備と稱するよりも、寧ろ警察力と稱する方が或は適正かも知れぬ。

併しながら自國支配權の及ばざる地域に於ては、販路の獲得は自由競争に據らねばならぬ。自由競争に勝つ爲めには品質の佳良、價格の低廉なることが最も重要な條件たるは勿論であるが、買手の好感を得ることも亦極めて必要な條件である。強大なる軍備は却つて反感をこそ招け、決して好感を求め得る所以の途ではない。之を以て侵略的帝國主義の行はれたる時代に在つては、軍備は國家發展の爲め、或は國家存立の爲め、直接に必要なる施設であつたが、搾取的帝國主義の現代に在つては、軍備は經濟上の利益を擁護する爲めに間接に必要である。

換言すれば前には侵略用の軍備を維持する爲めに經濟が必要であつたが、今は經濟的搾取を擁護する爲めに軍備が必要となつたのである。即ち軍備と經濟と、主從

其地位を轉倒したのである、更に他の言葉を用ゐれば、往時の武斷主義的帝國主義國家は侵略に依つて生きて居た。侵略には強大なる軍備が必要である。故に軍備は國家の生命であつた。即ち軍備は第一義的のものであつた。然るに現在の資本主義的帝國主義國家は搾取に依つて生きて居る。搾取には資本が必要である。故に資本が國家の生命である。それだけ國家に對する軍備の重要性が減じたのである。即ち軍備は第二義的のものとなつた。

世の中は適者生存で、時代に適する者が常に時代の寵兒となるのである。之を我國社會の人事に照らすも、過去の藩閥時代には閥族が權力を占めて居た。現在の金權時代には金さへ有れば政黨の總裁ともなり大臣ともなる。軍國主義時代には軍人が意張つたが資本主義の現在では金持萬歳である。

弱者の強者に對抗する力は數の團結である、勞働組合、農民組合等皆此理に基づく産物である。近時通信交通機關の發達は數の團結を容易ならしめ、兵力の劣れる

國は排貨同盟不買同盟等の經濟行爲に依つて強國の武力に對抗し得る様になつた。平和的なる是等の運動に對して兵力を加へることは、少くも國際道徳の許さざるところである。從來屢繰返へされたる支那の日貨排斥、經濟斷交等に對しては、強大なる日本の陸海軍の威力を以てするも如何ともすることが出来ない。もし又米國に於て日本生糸の不買同盟を行はゞ、日米間の問題は兵力に訴ふるを要せずして解決するであらう。

夕日の前に立てる軍備の影は刻々に薄れつゝある。

## 第八章 現代軍備と社會主義

社會主義とは一般的に言へば國家主義に對する主義である。國家主義とは、國と稱する一定の領域内に住する人民即ち國民の利益幸福を第一とし、自國の利益の爲めには他國の利益を犠牲とすることを是認するもので、即ち國家至上主義である。之を國際利己主義と云ふ。軍國主義、帝國主義は何れも國際利己主義で、國家主義に屬するものである。

自國第一主義であるが故に、自ら他國との衝突を生ずる。従つて之に應ずる爲めに軍備が必要となる。國家主義が濃厚となればなる程、戰爭の機會は多く、軍備の必要は大となる。

社會主義は國家なる地理的境域を超脱し、四海同胞の見地に於て全人類の和合を念とする主義である。元來社會（ソシアル）主義の社會なる言葉は和親を意味

せるもので、和親は争闘の反対である。故に社会主義は主義として国際戦争に反対する非侵略主義である。社会主義は政治的にも、経済的にも平等を主義とし、他民族を強制的に支配し搾取する帝國主義に反対するものである。従つて現在多くの國家主義國が有せる如き屬領地支配の爲めの武力を必要としない。既に外に對しては他國を侵略せず、内に在つては屬領地を有せざとせば、軍備を張る必要を認めない。故に世界の總ての國が社会主義國となれば、軍備の撤廢は期せずして行はれる譯である。

社会主義にも種々の分派がある、勞農露國の如く経済的には社会共産主義を採り、政治的には勞農獨裁を行つて居るものもある。英國勞働黨の如く社会民主主義の極めて穩健なものもある。又國家社会主義と稱するものがある。對内的には社会主義、對外的には國家主義を行はんとする極端的主義で、斯かる主義が論理的に成立し得るや否やを知らない。斯くの如きものは社会主義と稱しながら戦争を是認するも

ので、大に軍備を必要とする。

社会主義は非侵略主義であるとは云へ、必ずしも無抵抗主義ではない、元來在來の國家主義の生活に嫌らぬが故に社会主義なるものが生れたのである。故に社会主義は自己の生存を強認し、自己の生活を尊重する點に於ては、因襲の中に眠れる國家主義よりも一層強烈である、従つて自己正當の生存と生活とを脅かす不法の迫害に對しては、強き反抗心と抵抗力とを有するものである。唯自發的に、積極的に、利己的侵略を行はぬと云ふに過ぎないのである。

政治上の立場に於て社会主義と國家主義とは相容れない。經濟上の立場に於て社会主義と資本主義とは相容れない。故に社会主義を實行する爲めには國家主義、資本主義を打破することが必要であり、國家主義、資本主義を維持する爲めには社会主義を撲滅することが必要である。大體論に於て、國家主義は特權階級の支持者であり、資本主義は資本家の擁護者であり、社会主義は無産大衆の擁護者である。是



に於て社會主義對國家主義資本主義の間に階級的闘争が発生する。主義として國際戦争を排する社會主義の當面の敵とするところは、外國の軍隊よりも寧ろ自國內の資本主義位に之を擁護する國家主義である。

元來社會主義の目的とするところは無産階級の政治的、經濟的解放である。然るに社會主義を敵とせる資本主義の擁護者たる現在の軍隊なるものは、その最大多數は無産階級に屬する者である、即ち今の資本主義は反對階級に依つて守護せられつゝあるのである。故に無産大衆が眞に政治的に又經濟的に目覺めて、階級意識を有するに至れば、軍備と戦争とは極めて大なる動搖と變化を來すであらう、國家主義と資本主義との惱みが此處に在る、曰く思想善導、曰く青年軍事訓練、皆是れ無産大衆の眠りを覺まさるる子守歌である。

### 第九章 結言

地球が永久に西より東に回轉すると同様に、世界は不斷に右より左に轉じつゝある。即ち國際的には侵略主義より協調主義へ、政治的には專制主義より民主主義へ經濟的には資本萬能より勞働尊重へ、制度的には武斷壓制より自由平等へ、外交的には官僚秘密より國民公開へ、社會的には階級特權より四民對等へ、政策的には軍國主義より平和主義へ、思想的には國家主義より社會主義へと移りつゝある。今日如何に保守的なる國家主義國と雖ども、三十年前を顧みれば暗黙の裡に社會主義に移遷せることの大きなるに驚くであらう。三十年前の日本に於ては「社會」と云ふ二字の爲めに、新聞が發賣禁止となつた。今では官衙に「社會局」もあれば、政府の政策に「社會政策」もある。それ程世の中は左に進んで居る。目的と理由の如何を問はず、今や軍備縮少が正當視せられるに至りたる事が、

世界思潮の社會主義化せる明らかなる證である。社會主義の黎明が近づくに従ひ、軍備の御光は曉の月の如く薄くなりつゝある。資本家や軍人が好むと好まざるとに拘はらず、此世相轉變の自然の力を如何ともすることは出来ない。維新の武士が世の力に促されて、祖先傳來の大小を投げ棄てたるが如く、國家も何時かは其の軍備を解く時期が来るであらう。

(了)

昭和四年八月十日印刷  
昭和四年八月十五日發行

無産階級と  
國防問題 (非賣品)

著者 水野廣徳

發行者 東京市神田區錦町一ノ一二福原ビル 小池四郎

印刷者 東京市麹町區元町二ノ九 廣安與三右衛門

印刷所 東京市麹町區元町二ノ九 東水印刷所

發行所 東京、神田、錦町一ノ一二福原ビル クララ社 電話神田二二五二、四四九一 振替東京四六〇三三

九州支局 大牟田市旭町二丁目  
中支局 岡山縣笠岡町住吉町三  
北海道支局 札幌市南八條西八ノ三  
福島支局 福島縣野中區上前津町二  
名古屋支局 名古屋市中區  
平木次郎方  
岡田勸一  
佐藤金藏  
小島平兵衛  
社會通信社内

# 九月一日發行豫定

(八月中前金註文の分は二割引)

定價三十錢 送料四錢  
四六版一二〇頁

## 内容

- |                      |       |
|----------------------|-------|
| 一、民政黨の労働政策並に其自由主義の將來 | 龜井貫一郎 |
| 二、民政黨は地主と農民の何れをとるか   | 片山 哲  |
| 三、末梢的緊縮政策            | 島中 雄三 |
| 四、失業の激化を如何にするか       | 小山 壽夫 |
| 五、幣原外交の行詰り           | 宮崎 龍介 |
| 六、議會内に於ける民政黨         | 龜井貫一郎 |
| 七、金を持つものを肥やす金解禁      | 小池 四郎 |
| 八、濱口雄幸氏の正義觀          | 小池 四郎 |

# 民政黨はどこへ行く！

クララ社版

社會民衆黨本部編纂

# 民衆日記

十一月一日發行配本

我等の日記！初めて生る！

凡べてが社會民衆黨員に便利な様に編纂されてゐる、附録の内容もその着點から、都合よく整備されてゐます。

尙附録の編輯内容に就ては未だ追加増減の餘地がありますから、御希望の點は御申越下さい、充分尊重致します。

定價五十錢

クララ社版

(九月末日迄に前金注文の分には二割引)

黨員のポケットには必ず民衆日記を

最新刊

内容

- 一、社會民衆黨は如何なる狀勢の下に生れたか？
- 二、吾黨の議員と既成議員との相異
- 三、無產政黨合同に對する我黨の態度
- 四、黨役員とは何か
- 五、黨費はどうするか
- 六、支持團體の現勢
- 七、中央委員略歴

定價廿五錢 送料四錢  
四六版一二〇頁

クララ社版

小片山 池四郎 哲 共著 (社會民衆黨の生立と現狀)

伸び行く社會民衆黨

——本書は社會民衆黨のABCであり 同時にXYZである——

## 共産黨の分裂政策

—英國の労働組合は如何に之と闘つたか—

ウォルター・シトライン 著  
山崎 一 雄 譯

定價 32 錢(送料共) 日本民衆新聞社發行

## 民衆政治を目指して

—第五十六議會に於ける社會民衆黨代議士演説—

定價 22 錢(送料共) 日本民衆新聞社發行

## 産兒調節の理論と實際

小池四郎 著

定價 50 錢(送料共) クララ社發行

## 労働者に代りて資本家に與ふ

シドニー・ウエップ 著  
小池四郎 譯

定價 20 錢(送料共) クララ社發行

ク ラ ラ 社 取 次

# 民衆よ何處へ往く？

渡邊永作 著

最 新 刊

社會民衆黨を強調し紹介した今迄の著書の中でこの位平易にこの位興味深く書いてあるものは恐らくない、これを讀めばどんな人でも必ず安心してそして勇躍して黨へ参加して來るに相違ない。

黨員は黨勢を擴張するためにこの書を充分に利用すべきであり、黨を知らんとするものは先ずこの本を讀むべきである。

定價十五錢 下二錢  
四六版 七十一頁

ク ラ ラ 社 版

# 人は何故貧乏するか

アプトン シンクレア 著  
小池 四郎 譯

著者は現代、亞米利加が生んだ奇蹟的人物の一人で  
社會主義的評論家、小説家として國際的に高い位置を  
占めてゐる。本書は、その多くの著述中、最も廣く讀  
まれた大衆的評論である。世界の富が増加すると逆に  
貧乏人は殖えて行く、金持は愈々金持になり、貧乏人  
は愈々貧乏になるのが、近代文明國の不可避的の現象  
でそこに資本主義の考案した巧妙なからくりがある。  
貧乏發生の経路、及びその對策を簡明直截の言葉で、  
世界の貧乏人の前に提供したのが本書である。

定 價 八 十 錢

送 料 六 錢

春 秋 社 發 行

ク ラ ク 社 取 次

人は何故貧乏なるか

アブリンクレーブ 著  
小 池 四 郎 譯

富者に對して、貧乏者は如何なる地位に在るか。人は何故貧乏なるか。この問題を論ずる。貧乏の原因は、個人の努力不足、環境の不利、社会の制度、などである。貧乏は、個人の努力不足によるものもあるが、多くは環境の不利や社会の制度によるものである。貧乏は、個人の努力不足によるものもあるが、多くは環境の不利や社会の制度によるものである。貧乏は、個人の努力不足によるものもあるが、多くは環境の不利や社会の制度によるものである。

定 價 八 十 銭  
著 者 アブリンクレーブ

春 秋 社 刊

ク ラ ク 社 販 賣





61-221